正・政・清・聖・性・醒

炉ばたセイ談

令和４年秋号

巻頭言

テレビは万能です。ぼくが少年の頃は専らラジオでしたが、ラジオの良さは専ら、耳できいていろいろ状況を想像出来るというところでしょうか。これもアナウンサー次第ということになります。名アナウンサーと云われた人も確かにいましたが、人の声は実に不思議な力を持っています。

歌手のいのちはマサにその人の「声」にかかっています。これは天からのあたえられた「モノ」そのものですから、他人がどうこう出来るものではありません

すぐに思いうかべられる例は美空ひばりです。文字通り生まれつき彼女はウタがうまかったです。誰かに教わったわけではありません。

（重朝記）

巻頭言　　重朝

目次

また今年も夏が来た！・・・・・・・・・・入来院重朝・・・　１
入来花水木会再興に寄せて　・・・・・・・中西　喜彦・・・　２
「李朝工芸」で思った事　・・・・・・・・十五代沈壽官・・　５
５０歳という節目　・・・・・・・・・・・山本　洋子・・・　８
後世必ず清を知らむ～東・南シナ海波高し～
・・・宮下　亮善・・・　９
十一年前の黄金週間　・・・・・・・・・・串田　達治・・・１９
渋谷五族プラス・ワン　・・・・・・・・・白男川孝仁・・・２８
ゴミ拾いの哲学　・・・・・・・・・・・・田鍋　一樹・・・３４
武家屋敷群の活用とこれからの観光
・・・奈良迫英光・・・４１
蕎麦を打っ！　・・・・・・・・・・・・・米森寿美男・・・５３
お正月　― 回想　入来の出来事（1）
・・・中山とし子・・・５９
三橋敏雄の戦争俳句
― 遠山陽子「評伝三橋敏雄―したたかなダンディズム」を読んで ―
・・・梶原　宣俊・・・６７
根白坂古戦場跡 ― 歴史を訪ねる旅（16）
・・・下土橋　渡・・・７９
編集後記　・・・・・・・・・・・・下土橋・入来院・・・９０

表紙・画：山崎康子氏（入来院貞子さんの妹様、長野県諏訪市在住、画家）

また今年も夏が来た！

入来院　重朝

この原稿を書く季節がやって来た。つまり夏だ。テレビを見ていると大体この時期高校野球をやっている。野球はもう国技に近い。相撲とどっこいだろう。

日本という国は歴史の古い国であるから何でもサマになる。

テレビ時代はすべて世の中のこと一瀉千里で万人のモノになる。なんともいいようのないキセキの世の中なのだから、今も生きることがキセキなのだ。

人生６０年とむかし云ったが、いまは何年だろう。自分が９０歳になっているのを最近自覚したが、先ずピンとこない。この歳でいくと百歳も簡単だろう。

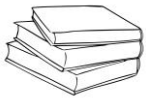
しかし、長生きしているからいいというもんでもない。むかしはガンか何かになって、丁度いいあんばいに死ねたが、今はそう簡単にはいかない。生き恥さらしているのも自覚がないから、全く仕様がない。

人の道とは、結局どう生きるかということに尽きる。

（炉ばたセイ談庵主）

入来花水木会再興に寄せて

中西　喜彦



入来花水木会と「炉ばたセイ談」誌との関係について考えて見ました。本誌は発刊後十八年目を迎えます。

実は故貞子さんは会社退職後平成６年に東京から庵主重朝氏の実家に帰郷されました。翌年には重朝氏も帰郷され、入来花水木会を結成され、郷土の文化振興活動に尽力されました。渋谷五族下向７５０年に関する記念事業を思い立たれました。平成１１年には第１回の薪能を開催され、以後６回まで毎年続けられました。

その後大病を患われ、第７回の薪能は平成２２年に再開されています。

一方「炉ばたセイ談誌」は、平成１７年に鹿児島ペンシルクラブ同人の一部の方々と身辺記として、身近な自伝や先祖の紹介などを載せて創刊されました。

１号はガリ版刷りからスタートしたと聞いております。自伝的なものや先祖の紹介など、５号や６号などでは自分達の遺言のような印象を持ちました。

平成２３年春に貞子さんの不慮の事故死を受けて、７号からは筆者と下土橋氏が編集を受け継ぐことになりました。「誌面で貞子さんに再会」を旗印に貞子さんの履歴や文学、歴史などの著作や上演された薪能を紹介しました。なお、１号から１２号は故桐野三郎会長の元で発刊されました。１３号から１６号までは、最初からの本誌会員であった澁谷繁樹氏が会長となり、その後筆者が会長としてお世話することになりました。

特筆することとして、ＮＨＫの「家族に乾杯」で訪問を受けた縁で貞子さんの3回忌に鶴瓶師匠が奥さんやお弟子さんと訪問され法要落語の「錦木」を披露されました。さらに7回忌の様子なども本誌に紹介しております。

毎年会誌発行時に著者達が重朝邸に集まり楽しく会食するのを常としてきました。庵主重朝氏の米寿の祝いや会員の日頃の考えなどが紹介されております。その後、澁谷会長の急逝を受け17号から筆者が会長になりました。特に昨年からは入来花水木会再興の機運が高まり、今年6月に第1回の総会が開催され、本格的な活動が始まりました。

振り返ってみると、最初に入来花水木会を立ち上げられた貞子さんは、朝河貫一博士の「入来文書」の解説書の出版や関連講演会などを開催されました。入来院家と相良家が日本で一番長く一か所に存続した家であり、特に入来院家は鎌倉時代から幕末まで一か所に存在し、その記録が朝河貫一博士により「入来文書」として紹介されております。それは日本の武士社会とヨーロッパの騎士社会との比較をし、その違いを明らかにしたものであります。

以上のことから会誌発行の十八年間を振り返ってみますと、その内容も時代と共に変遷しております。最近、重朝氏と故安倍晋三首相暗殺事件について話したことがあります。「武士の社会から完全に町人社会に変わりましたなあ。」私も全く同感しました。すべてを他人や組織、あるいは社会の責任にし、自分の責任を認めません。「一所懸命に頑張る」と申しますが、警備担当者が職に命を懸けなかった単純な事件だと思います。また、昨年入来院の継続性について、その理由につ

いて質問したことがあります。「何もしなかったことです。」これにも変に私は同感しました。私は重朝氏の直感的な感覚にこの十年あまり敬服してきました。本誌が続いたのも庵主重朝氏の細部にこだわらず、続けていこうと云う姿勢によるものだと思います。また、編集面で7号以来レイアウトや挿入イラストなどに工夫をされてきた下土橋渡氏の工夫によるところ大であります。

5年前父親の介護を兼ねて帰郷された長女久子さんがこの度母親の遺志を継いで入来花水木会を再興されることはまことに時期をえたものと考えられます。本誌がその機関誌としての役割も果たしつつますます発展することを祈念いたします。

（鹿児島謡曲連合会会長、鹿児島大学名誉教授、炉ばたセイ談会会長）

「李朝工芸」で思った事

十五代　沈　壽官

「李朝工芸」と言っても、僕に多少分かるのは焼物だけである。

勿論、家具や民画、刺繍、農機具なども好きだ。家具は金物が少なく、良い家にあった物がいい。漆を使わず裏まで油で拭きあげている。金具の種類で産地が分かるのもいい。良く干し上げた松材を使っているが、痩せた土地での成長の苦労が年輪から伝わってくる。民画も独特の絵画様式があり、その剽げた所が彼等らしい。刺繍は圧巻だ。陶磁器に月明の美を求める彼等が、一転鮮やかな色彩を紡ぎ出す。

ソウルを訪れると、ソウル市立工芸館や長安坪の骨董街を見て歩く。

古物の真贋を見分ける力が無いので、購入する時は専門家と訪ねるようにしている。

先日、韓国を訪問した折、慶尚南道の昌原市の熊川を訪ねる機会を得た。

私の初代、沈当吉が慶長の役の際（１５９８年）に日本に移住した後、およそ１７年の歳月を経てようやく白い焼物を島津公に献上したところ、「まるでコモガイの様である」と大層喜ばれたと伝えられている。

この「コモガイ」とは、当時朝鮮陶磁全般を指す言葉だとは知っていたが、語源は何だろうとずっと考えていた。

朝鮮半島南部で焼かれた質朴で大らかな焼物達は、現在の昌原市熊川港から日本に送られた。

私は、今回この熊川が、「コモガイ」ではないかと考えた。

「熊」は韓国で「ウン」とも読むが、「コム」とも読む。又、「川」は「チョン」だが「河」は「ガン」と読む。

つまり熊川を熊河と当てると「ウンチョン」が「コムガン」となる。

有田焼が伊万里港から出荷された事から伊万里焼と呼ばれた様に、朝鮮陶磁も「コムガン」の名前で呼ばれたのかもしれない。当時は平気で当て字を使う。実際、この辺りからは、まるで萩焼か唐津かと見まがう様な陶片が出土する。

この熊川港から民窯で焼かれた大量のサバル（万能碗）が日本の茶人、とりわけ「草庵の茶」を志向した村田珠光や武野紹鴎、千利休らによって、見立ての世界で名器となっていく、そう勝手に考えながら美しい海の景色を眺めてみた。

そういえば、李朝工芸と言えば、忘れてはならないのが、柳宗悦、浅川兄弟であろう。

彼らは、その当時韓国で評価のあまり高くなかった李朝工芸の美しさを見出し、現在の評価の礎を作った。

よそ者は良いとこ探しの名人だ。

土地の人が当たり前、つまらない物と思う物を面白がる。それが新しい局面を作る。彼等の心情の底辺には、武断政治を行う日本政府に対する反発と朝鮮の人々を分け隔てなく愛する寛容さがあった。

ソウルの東、萬憂里の共同墓地にある浅川巧の墓に詣でたが、その命日には多くの陶芸家や林業関係者が居たのを記憶している。韓国の工芸をこよなく愛した日本人は、海峡を越えていまだに慕われている。

韓国の尊敬する先輩の言葉を思い出した。

「日帝支配３６年は暗黒の時代だった。しかし、清流の様な日本人も数多くいた。彼等の存在まで黒く塗りつぶすことが韓国の為になるのか?」と。

彼は大邱の水崎林太郎の墓守をしていた。その彼が地元の韓国の青年達に語った言葉だ。

５０歳という節目

山本 洋子

自分がこの秋に５０歳になるなんていまだに信じられないでいる。

先日、生命保険会社に勤めていた同期５人とミレニアム年ということで新大久保で待ち合わせ、ＢＴＳファンの幹事が予約してくれた韓国料理屋で久しぶりの再会を果たした。

三十年前の職場はまだパワハラ・モラハラ・セクハラなんて言葉が浸透してなかった時代。先輩たちのいじめにも近い指導に耐え（笑）最後の新人と呼ばれて四年間も下積みを経験した私たちは戦友に近い感覚がある。

みんな子持ちの主婦になり、まだ小学生の子供をもつ人もいて立場はそれぞれ違うけれど、昔話に花が咲いてとても幸せな時間を過ごすことができた。当時はまだそれほどパソコンも普及しておらず手作業処理の多い事務職は本当にしんどくて体調も壊したりしていたけれど、こうして何十年も続く仲間がいてくれるのはあの頃頑張ったご褒美だと今にして思う。

韓国料理とお酒に舌鼓をしつつ、更年期やら介護やら子育ての話題でさすがに年齢を感じたが、いつまでもみんな仲良くこれからも健康でいられたらいいなと思う。

そして、約十年ぶりに集合したので、これからは年一で集まろうと約束してそれぞれの帰路についた。

後世必ず清を知らむ
～東・南シナ海波高し～

宮下　亮善

『尖閣諸島(沖縄県石垣市)周辺の領海外側にある接続水域で十七日、中国海警局の船4隻が航行しているのを海上保安庁の巡視船が確認した。尖閣周辺で中国当局の船が確認されるのは一二四日連続。第十一管区海上保安本部(那覇)によると、一隻は機関砲のようなものを搭載。領海に近づかないよう巡視船が警告した。』

八月十八日掲載の新聞情報である。

歴史にｉｆもしあの時こうであったなら、その後の歴史は変わったものであったろうと思われる。時々の時代の事象を捕らえて表現されがちのものであるが、あの時、西郷隆盛が朝鮮の大院君に会い明治新政府と和解が成立したならば、その後の歴史はどのようなものになっていたかというｉｆである。著者の見立てでは『征韓論＝遣韓論』は終焉してはいない。寧ろ現在進行中の問題であると。

『独り、事情に適せず、豈、歓笑の声を聴かんや羞を雪ぎて戦略を論じ義を忘れて和平を唱ふ秦檜遺類多く武公再生難し正邪今邦ぞ定まらんや後世必ず清を知らむ』

自分一人だけ時勢に合わず、意見が用いられなかった。どうして反対派の人々の歓び笑う声に耳を傾けておれようか、いや、聴くにたえない。武公岳飛が金に進攻された宗国の恥じをそそぐ為防御反撃の戦略を論ずると、正義を忘れて金と和平を唱えた売国奴の秦檜、その残党のような者どもが多く、武公のような忠臣はもはや再び世に出にくくなった。こ

のたびの朝鮮問題はどちらが正か邪か今どうして決まろうか。決められるものではない。後の世の人々は必ずどちらが清く正しかったか知るであろう。この詩は、征韓論＝遣韓論争に破れ下野した明治六年十月に詠んだものである。明治維新は、欧米列強からの植民地支配との必死の戦いであった。

そもそも征韓論＝遣韓論とは、どのようなものであったのか、他の文献を引用して説明させていただきます。幕末にも欧米列強に対抗する外交政略として、吉田松陰・橋本佐内・勝海舟らによって征韓論が出張され、木戸孝允も中央権力を強化させる施策として征韓の実行を唱えた。明治政府は一八六八年(明治元年)十二月、対馬藩主宗氏をして王政復古を朝鮮に通告させ、中絶していた旧交を復そうとしたが、朝鮮側は書契の形式が旧例に反するという理由で拒んだ。ついで、外務省の佐多白茅・森山茂・花房義質らが交渉に赴いたが解決しなかった。これは当然国王李熙の父大院君が国政の実権を握り、排外鎖国政策をとっていたからであった。このような韓国の排日策が明治六年に至って征韓論＝遣韓論という大きな政治問題となった。西郷留守政府の閣議に上程され、陸海の兵を韓国に派遣してわが居留民を保護すること、使節を派遣し韓国に直接談判させることの議案であった。この議案に対し板垣退助は出兵論を主張した。これに対して西郷隆盛は「出兵するよりまず責任のある全権使節を派遣して平和的な交渉をなし、それでも韓国が聞き入れない場合は韓国を討つのもよかろう」と論じ、その使節には西郷を派遣させたらと希望した。諸参議の多くは西郷の説に賛成し、八月十七日の閣議において西郷を遣韓大使とする、ただしその発表は岩倉大使らの帰朝を待って行うこと

にした。

ところが岩倉大使一行が九月帰朝すると、岩倉・大久保らは内地の整備が第一で外征は後にすべしとの理由で反対した。征韓派、内地派に迫られた太政大臣三条実美は煩悶のすえ病気となった。これを幸いとした大久保らは『秘策あり』として宮廷工作を実行し、岩倉大臣に太政大臣の職務を代行させるように

西郷隆盛（1828～1877 年）

した。岩倉は明治天皇に征韓論に反対する意見を奏上して勅許を得たる。ここにおいて西郷隆盛・板垣退助・後藤象二郎・江藤新平・副島種臣の五参議は岩倉に不満をもって下野した。これが明治六年政変の流れである。

『酷史去り来って秋気清く、鶏林城畔涼を遂うて行く。須らく比すべし蘇武歳寒の操、応に擬すべし真卿身後の名。告げんと欲して言わず遺子の訓。離ると雖も忘れ難し旧朋の盟。胡天の紅葉凋零の日、遥かに拝せん雲房に霜剣の横わるを。』

酷暑が去ってしまい、さっぱりした秋のけはいが出てきて、気持ちのよい時候になったが自分はこの度大命を奉じて朝鮮の京城城のほとりへ涼しさを追うて行く事になった。何という有り難い事であろうか。いやしくも大命を奉じて行くからには、昔漢の蘇武が雪の日に守った美しい操に比すべき操を守り、唐

の顔真卿が死後にのこした芳ばしい名に似通った名を揚げねばならぬ。自分は今決死の覚悟をしているので、子供等に教訓を残して置きたいと思うがあえて言わず、旧友達に離れて再び会う事ができなくなっても、以前に交した忠誠の盟は決して忘れることではない。やがていよいよ秋も深まり、北国朝鮮の紅葉が凋みおちるころには、自分は殺されるか自刃するかして問罪の皇軍が派遣される事になり、九重の雪深きあたりに、近衛兵の銃先に霜と光る銃剣が林の如く連なり立っている壮観を、草葉の蔭からはるかに拝む事であろう。

この詩は、一旦は全権使節として閣議決定された時の感慨を詠んだものである。決死の覚悟で大院君と交渉し両国の善隣友好を成し遂げ列強の植民地支配を打破するための壮大な構想を西郷隆盛自身の文明論から推論できる。すなわち文明とは、道義の普く行われるを称賛せる言にして、実に文明ならば、未開の国に対しなば、慈愛を本とし、懇々説諭して開明に導く可きに、左は無くして未開蒙昧の国に対する程むごく残忍の事をいたし、己を利するは野蛮じゃと。

『御仏の浄光明がとこしえに
　護るならまし南洲の夢』

与謝野晶子が、昭和四年に鉄幹とともに、西郷隆盛の墓前で詠んだものである。南洲の夢とは、道義の普く行われる東亜の和平であったと考えられる。この征韓論＝遣韓論は明治維新新政府の外交方針に対する国論を二分する大問題であった。西郷隆盛下野後の政府は明治七年台征討を決定し、同八年朝鮮西海岸において、軍艦雲揚が江華島守備兵と交戦する江華島事件を起こす。同九年『日朝修好条規』を締結する。この後、日清、日露戦争をへて、列強の植民地帝国主義という時代の

潮流に漕ぎ出す端緒を結果として開いた『明治六年の政変』であった。

列強のアジア侵略の端緒は、スペイン人マゼランが、一五二一年に太平洋を西に進み、ミンダナオ島の東岸に到着した事であった。その後スリガリ海峡に停泊し、上陸した小高い丘に祭壇を設けて十字架を立て、スペイン領であることを宣言した。おりしも大航海時代とあいまって、列強のアジア・アフリカの植民地争奪のはじまりであった。

一五五七年ポルトガルがマカオを略奪。一五七一年スペインがフィリピンを統治。スペインのフィリピン統治は三百二十年余り続いた。一五八一年オランダがスペインから独立。一五九六年オランダ第一回アジア遠征隊がジャワに到着。イギリスがアジア侵略をはじめたのは、コロンブスのアメリカ大陸発見以来、広大な新植民地を経営して富強を誇っていたスペインに挑戦し、これを屈服させてからである。当時、イギリスと並んでアジア・太平洋に侵入してきたのはオランダだった。

イギリスが東インド会社を組織したのは一五九九年であり、オランダが東インド会社を組織したのは一六〇二年である。一七七〇年オーストラリア、ニュージーランドを手中にし、一八一九年シンガポールを奪取し、香港を奪い、マレー、北ボルネオ、太平洋に広大な植民地を獲得した。さらに、中国では、アヘン戦争以来、アロー号事件、太平天国の乱などによって大きな利権を手に入れた。その後、イギリスの中国における利権をおびやかす国が次第に多くなってきた。フランス、ロシア、アメリカ、ドイツなどである。このような国際情勢の中、一八五三年(嘉永六年)ペリーが四隻の艦隊を率いて浦賀に入港し幕府に開港を求めた。軍艦サスケハナ号に乗っ

たペリー率いる四隻の艦隊が浦賀に入港したのは九月三日だった。アメリカ艦隊の威力を示して条約を締結しようとする目的であり、その態度は強硬で高圧的であったといわれている。

『黒船たった四はいで夜も眠れず』

幕末動乱のはじまりである。

『かくなればかくなるものと
　知りながらやむにやまれぬ大和魂』

吉田松陰（1830～1859 年）

国禁を侵し必死の嘆願もペリーには、その思いは届かず板橋戸塚原の刑場にさらされた安政の大獄。松下村塾の弟子たちにその意志は受け継がれ明治維新を成し遂げた。

『身はたとえ武蔵野野辺に
　くちるとも留めおかまし大和魂』

一八六七年(慶応三年)大政奉還。一八六八年(明治元年)明治維新成る。ペリー来航以来、明治維新までの十五年ものの間、尊王攘夷、公武合体など国内は大いに騒乱すれども、外国の干渉を拒絶して独立を守ったことに、後々の日本人たちは、その事に誇りを持ち先人に感謝しなければならないと思う。過去、マゼランがフィリピン統

治以来およそ四百数十年ものあいだアジア・アフリカで唯一独立を守ったのが日本だからである(註、タイ国は巧みに中立を守った)。

今、何故、後世必ず清を知らむ。西郷隆盛亡き後、朝鮮問題の真の目的、アジアの民族自決の理想を理解しようとはせず、日露戦争以後、東南アジアの植民地化に加担する結果となった。

そして、今、中国共産党政権は偉大なる中華帝国の復権を求めて、アジアを世界を席巻しようとして、軍事大国の道を邁進している。二〇二一年十月十日、米インド太平洋軍のフィリップ・デービトソン司令官は九日、上院軍事委員会の公聴会で、今後六年以内に中国が台湾を進攻する可能性があると証言した。中国の軍事研究集団が「日本が台湾有事に軍事介入すれば、中国はただちに核攻撃を日本に加えるべきだと」新戦略を打ち出している。『台湾有事は日本の有事』故安倍元総理の警鐘そのものである。

中国の軍事行動に詳しいトシ・ヨシハラ氏は「中国政府は明らかにこの種の対外憎悪の民族感情を煽っている。とくに日本への敵意や憎悪は政策形成層にも強い。その間違った世界観が中国政府に実際の戦略を大きく錯誤させる危険を日米同盟は認識すべきだ」と警告している。

中国に新華社通信傘下の『参考消息』という国際情報専門の新聞がある。習近平国家主席が新興五カ国首脳会議で『重要講話』を行ったことを伝えている。その内容は世界経済や国際政治のしかるべき未来像を提示した上で、全人類の未来の方向性を示したものであると。偉大なる中華帝国を復興し、自らが皇帝として君臨するという壮大な野望の実現である。十九世紀における列強の植民地支配に

対する怨念すら感じさせるものがある。

尖閣列島も当時の国際法（先占の法理）にもとづき明治政府が日本の領土として編入したものであり、国際社会もそれを認めて今日に至っている。勿論、当時の中国においても何らの異論もなくまた批判もしていない。もともと中国からして尖閣列島などというものは蛮族の棲む化外の地で何ら歯牙にもかけないものであった。それが国連の経済委員会が尖閣列島周辺の海底油田の調査を行い膨大な埋蔵量が確認されたことにより、にわかに領土の領有権を主張しだしたのである。

南シナ海の不法占拠も同様の手口で領有を主張し、サンゴ環礁を勝手に埋め立て、国際司法裁判所の判決を単なる紙切れとして、フィリピンの主張を無視し軍事拠点化を進めている。韓国の竹島の不法占拠、ロシアの北方領土の不法占拠。西郷隆盛が当時恐れていたものがロシアの南下であったといわれている。北海道の屯田兵の開拓もロシアに対する防衛線としての位置付けであった。

アメリカは日本の日露戦争勝利のときから、日本を仮想敵国として、その戦いの準備をしてきたといわれている（オレンジ計画）。大東亜戦争敗戦により、東京裁判（極東国際軍事裁判）により、戦争犯罪者として、軍人はもとより、文官や民間人も被告人として裁いた。この裁判は勝者による報復であるとして、インド代表のラーダービノード・パール判事が正面から反対した。『平和に対する罪』『人道に対する罪』が事後法（連合国に都合の良い後付けの法律）。裁くものの手は汚れていないかとして、戦争裁判そのものが無効であると主張した。すなわち、日本の戦争指導者が人道に対する罪であるというのであれば、広島・長崎の人々への原爆投下はどう説明する

のか、列強の四百数十年の植民地支配は何ら罪は無いというのか、そのことをパール判事は問うたのであるが、その主張は全く無視されＧＨＱ(連合国軍総司令部)のシナリオどおりの判決が下された。

その後、マッカーサーは外交軍事委員会で証言し「日本の戦争は自衛の戦争であった」と。われわれ日本人はこの発言の意味を今こそ考えるべきではないのか、西郷隆盛が城山で自刃し、大東亜戦争敗戦までの分水嶺が明治十年の政変であったといえる。そして、七十余年後、ロシアのウクライナ侵略、中国の台湾進攻の危機、北朝鮮の核兵器開発による周辺国への恫喝、ロシアの北海道周辺の軍事演習。戦後、日本が望まない国際情勢が急激に変化している。そして、この国々は核兵器を所有する独裁国家であるという現実。憲法九条があるから戦争は起こらない。われわれ日本人が鉄砲を持って外国に戦争を仕掛けるなどと、誰ひとり考えていない。

しかし、好むと好まざるとに拘わらず外から戦争がやって来たらどうするのか、先日、ある会合のパネラーとして参加しました。冒頭、『九条を抱きしめたい』という映画の上映。プロパガンダそのものであったが、九条を抱きしめて欲しいのは、寧ろロシアであり、中国であり、北朝鮮であるべきだと。

自分の身を守るという事は理屈では無い人間の持つ当然の本能である。二百七十余年、太平の夢を覚醒したペリー来港。戦後七十年の平和を謳歌した時代が脆くも崩れさるような重大な岐路に立たされているようである。外交交渉は勿論の事、徹底した防御体制を築くと同時に「自分の国は自分が守り抜く」当たり前の事にあらためて思いをいたすべきである。日米同盟があるからといって安心はで

きない。日本人自身が命かけて自国を守らないのに、どうしてアメリカの母親たちが自分の息子たちをよその国の戦争に駆り立てるでしょうか。立場を変えて見れば自明のことである。

『独立の気力なきもの
国を思うこと深切ならずや』
福沢諭吉翁の箴言。

「正道を踏み国を以て斃るるの精神無くば、外国交際は全かる可からず。彼の強大に委縮し、円滑を主として、曲げて彼の意に順従する時は、軽侮を招き、好親却って破れ、終に彼の制を受けるに至らん」「談国事に及びし時、慨然として申されけるは、国の凌辱せらるるに当たりては，縦令国を以て斃る共、正道を践み、義を尽くすは政府の本務也、然るに平日金穀理財の事を議するを聞けば、如何なる英雄豪傑かと見ゆれ共、血の出る事に臨めば、頭を一処に集め、唯目前の苟安を謀るのみ、戦いの一字を恐れ、政府の本務を墜しなば、商法支配所と申すにて更に政府に非ざる。」南洲翁遺訓より。

自由で開かれたインド太平洋構想の実現とアジア版ＮＡＴＯの構築をいそぐべきかと。

南洲の夢遥かなり。

東・南シナ海波高し！！

（天台宗大雄山　南泉院住職）

十一年前の黄金週間

串田　達治

「なんでもいいから今年の炉ばたセイ談に何か書いてみない？締め切りは８月３１日」・・・・・・

毎度のことながら母からの指令は突然やってくる。冊子の編集長をされている方に入来花水会のホームページを作って頂いたそうで、そのお礼に原稿を集めているのだとか何とか。下品でなければテーマは何でもいいとの事なので気軽に引き受けてはみたものの、普段はフェイスブック等で友人相手にくだらない近況ばかり投稿している自分に高尚な文章など書けるわけもなく、歴史ネタも特に思いつかないので途方に暮れながら入来にまつわる思い出の中で何かネタはないかと思案していると・・・思い出した。世間に公表していいものかどうか迷ってしまうような究極の身内ネタがあったことを。

十一年前の平成二十三（２０１１）年、東日本大震災という未曾有の災害にみまわれてまだ間もないゴールデンウィーク真っ只中、不慮の事故により母方の祖母が急逝した。たまたま祖父が不在の時に運悪く自宅の石畳の上で転倒してしまい、相当打ちどころが悪かったようで3時間にも及ぶ大手術を施されるも残念ながら助からなかった。この数年前に祖母がガンで体調を悪くしていた時に家族を連れて見舞いに行き、その後回復して元気になったと聞いて安心していた矢先の出来事で、

ガンを克服してしまうような強い人が転んだだけで命を落としてしまうなんて・・・当時津波のことも相まって人間の一生など何が起こるか本当に分からないと強く感じたことを覚えている。

亡くなった祖母の葬儀は5月5日に薩摩川内市内において、連休中に遠方から駆けつけた大勢の親族に見送られながら盛大に行われた。葬儀後ひとまず妻と子供たちは先に久留米の自宅に帰ってもらい、私は後片付け等で7日まで入来に残る事となるのだが、まさかこの後さらにとんでもない事態に巻き込まれることになろうとは！

色々と前置きが長くなったが、本題はこの亡くなった祖母の、とても田舎のおばあちゃんの葬式とは思えないほど盛大に行われた葬儀後に待っていた、入来の屋敷の台所で起こった壮絶な出来事である。思い出すと色々つらくなるので以下、当時の私の日記を転載させていただく。

平成二十三年5月15日　（くしだんごの日記より抜粋）

連休から一週間が過ぎたというのになかなか疲れが取れない・・・

さて、思い出すのも嫌なのだが、ゴールデンウィーク後半の出来事を綴ろうと思う。

個人的にメールを下さった方の中には、身内の葬儀よりつらい出来事と聞いて心配された方もいたかもしれない。ただ、亡くなった祖母の形見ともいえる指輪を病院で紛失したとか、十人近い従兄弟たちを相手に三十路手

前のおっさんが鬼ごっこをして心筋梗塞を起こしかけたとかそういう類の「つらい」ではないのであしからず。

話は5月1日に急逝した鹿児島の祖母の葬儀を無事終えた5日の午後まで遡る。

親族一同バスで火葬場から一時間ほどの入来の屋敷に戻ってきたのが午後5時頃。悲しみと疲れからか、祖父が部屋に閉じこもってしまった・・・

これを心配した母が一週間ほど鹿児島に残って後始末を兼ねて祖父の面倒を見ることになった。ただ、本来は二泊の予定で久留米に遊びに来ていただけなので、着替え等を取りにいったん自宅へ帰ることに。

2009年、初孫の達治に次男誕生で久留米までペアルックで曾孫に会いに訪れた入来院夫婦

連休で新幹線の予約が取れず、母が戻ってくるのが7日の夕方になりそうだということで、母の代理（身代わり）で私が7日まで鹿児島に残ることとなった。

まあ二日間だけだし、焼酎でも飲んで祖父を励ましつつのんびりしようと思い、葬儀の日の夜は親族で祖父を囲んでしこたま飲んだ（飲まされた）。

お酒が入ると祖父も徐々に元気を取り戻し、子や孫に囲まれてだんだんご機嫌になり、しまいには酔っぱらって「いや～それにしても今日の披露宴は盛大だったな～」とか言っていたような・・・

結局親族飲みは深夜まで盛り上がったのだが、翌朝、たった一通のメールが事態を一変させた。

「私が戻るまでに冷蔵庫及び台所の片づけを皆でしておくこと。時間があればお香典の集計も」

母からの指令だ。

当然ながらうちの母親の命令はすべてにおいて最優先される。それは母の兄弟の間でも同様のようだ。

メールの内容を居残り組に報告すると、昨夜あんなに楽しく飲んだのがまるで嘘だったかのように一同重たい雰囲気になった。

なぜなら、この屋敷の台所を片付けるという事がどういう事か皆理解しているからだ。

摩訶不思議なことにあれだけ多方面にわたって活躍した祖母は、びっくりするほど片

付けができない人だった。
世の中には身の回りの片づけができなくて困っている人などごまんといると思うが、面倒くさくて普段片付けをしないだけで、やろうと思えばちゃんとできる人たちは意外と多いと思う。

しかし、中には片付けの仕方が全く分からない本当に困った人もいるのだ。

世間一般的な感覚の持ち主である祖父が部屋全体の掃除、片付けはしていたらしく、全体的にちらかってはいないが、問題は台所である。

祖父は台所には立ち入らなかったようだ。

つまり、親族皆見て見ぬふりをしていたのだが、この屋敷で今一番片付いていない場所が台所なのである。

1日に祖母が病院に運ばれて以来、丸5日手つかず状態の「禁断の場所」。

ひとまず現場の確認に赴いた。

そこには事件現場かと見紛う光景が広がっていた・・・

・・・どこから手をつければいいのか一同途方に暮れていたが、ようやく覚悟を決めたのが午前十時前。以下、現場に立ち向かう勇気ある隊員たちを紹介する。

隊員A・・・亡くなった祖母の長男さん。ラ・サール出身の超エリートで音楽活動もされているのだが、なぜだかオーラが感じられない。

隊員B・・・Aの奥さん。きれい好きな方なのか、片付ける前から精神的なショックを受けている様子。

隊員C・・・AとBのひとり娘で現在大学三年生。若いってすばらしい。

隊員D・・・亡くなった祖母の三男さん。長野のお寺で住職をされている。昨夜も最後まで飲んでいた酒豪。

隊員E・・・Dの奥さん。こちらのご夫婦は三男一女と子沢山。

隊員F・・・亡くなった祖母の末娘。私の母と十四歳も年が離れているため感覚的に叔母というよりは姉に近いかも。

隊員G・・・Fのご主人。とある料亭の副料理長であるという理由だけで現場監督に満場一致で選ばれたかわいそうな人。

以上私を含めて作業員は総勢8名。

ガスマスクと防護服の用意が整わないまま監督の指示で片付け作業が始まってしまった。

作業開始2分ほどで隊員Dの姿が見えなくなったが、テーブル上は分別に戸惑ったものの一時間ほどで片付いた。

平行して行った流し台の片づけも、当初は天空の城ラピュタに出てくる海賊船の流し台みたいだったものが、そこはさすがに現役バリバリの主婦である隊員B、E、Fらの奮闘によって人間が使える程度に片付いた。

しかし、問題は冷蔵庫の中身である。

昼休憩をはさんだ後、隊員全員が固唾をのんで見守る中、監督である隊員Gがそっと冷蔵庫の扉を開けた。

ついにパンドラの箱を開けてしまったのだ・・・

冷蔵室は隙間もないほどの食材で埋め尽くされていた。

亡くなった祖母はスーパーで気に入った食材を買い、買ったことを忘れてまた同じ品を買うといった行為を繰り返していたのだろうか。

とにかく、同じキムチの瓶が4個もあるのはそういうことでしか説明がつかない。

冷蔵室の片づけで一番大変だったのは、人間が食せるものとそうでないものとに選別する作業だった。ただ、ほとんどの食材の賞味期限が切れていたため捨てる作業といっても差し支えないのだが。

午前中に片付けたテーブルの上が今度は「かつて食材だったもの」で埋め尽くされた。

２００９／０４のなめ茸。
２００８／１１の納豆。
２０１０／０３の漬物などなど。

日付はお察しの通り。

手前はここ4、5年前の代物がほとんどだったが、奥のほうで安置されていたものの中

には９０年代に突入するツワモノも潜んでいた。

鮭フレークも９６年ものになるとサーモンピンクからダークグレイに変色するらしい。

食事中にこの拙い文章を読んでいる気の毒な読者もいらっしゃるかと思うのでこのあたりで自主規制する。

作業がはかどらない理由のひとつは、入れ物と中身が高い確率で違っていることだった。

全部使い切った食材の入れ物（主に瓶）に別の食材を入れて保管していたようである。

作業の進捗状況を報告するついでに母に指示を仰いだ。

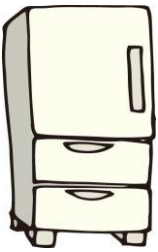
「ごはんですよの瓶の中にうめぼしが入ってたりするんだけど、全部捨てていいよね？」

「一応中身確認してから捨てなさいよ」

・・・確認って・・・毒見ですか？！

監督（副料理長）である隊員Ｇの身に危険がせまった。

おりしもユッケで食中毒を起こした患者が死亡したというニュースが世間を騒がせている時期である。何事もなければよいが・・・



冷蔵庫の作業開始から2時間も経過すると台所の腐臭がとんでもないものになっていた。

私を含め現場作業中の隊員たちは感覚が麻痺して気づかなかったのだが、ふらっと様子を見に来た隊員Dがものすごい形相で台所の窓を開けた。

窓を開け放ったことで飛来してくる虫さんたちを追い払いながら、普段は食材を大切に扱っているはずの隊員Gが問答無用で全部捨てだしたのでようやく作業がはかどってきた。

夕方にさしかかり、野菜室の中から凍死したゴキ〇リを数体発見したあたりで女性隊員たちの姿が見えなくなった。

本日中に冷蔵庫内への放水まで終わらせたい。

ようやく片付け作業にも終わりが見えてきた午後6時頃、報告が入った。

「監督っ！

庭の倉庫にも稼働中の冷蔵庫を発見しました！

中に卵が６０個ほど安置されている模様・・・」

ぼくたちの連休は、まだはじまったばかりだった。

（炉ばたセイ談庵主の初孫）

渋谷五族プラス・ワン

白男川　孝仁

一、はじめに

平成27年に鹿児島県で、第30回国民文化祭が開催され、出水市は『鶴のまち俳句大会』と日本舞踊の会場となった。

それまで俳句は全くの門外漢であった私だが、地元の一員として一緒に盛り上げようと初投句を試みてみた。

ただ、偶然出会った高校の同級生が、季重なりの迷句を見かね、その後『俳句会』なるものに誘ってくれた事が幸いであった。

『夕鶴俳句会』は、毎月一回出水市中央図書館に於て、鹿児島市の俳句結社『河鹿（かじか）』の主宰・淵脇護先生が、直接ご指導下さる勉強会で、期待も緊張も高まった。

出席してみると、女性だけの中の黒一点であったが、皆さんから歓迎していただいた。

『王様の湯上りを待つメロンかな』（夏）

我々にとって高嶺の花であるメロンを頂いたので詠んでみたのだが、予想に反して大好評であった。

元来の勉強嫌いだったので、『誉められて伸びるタイプ』のワガママ野郎である。

最初が誉められて良かった。

そして次回には『月一回の勉強では物足りません。』と言ってみた。

すると句会終了の後、常宿に招かれ、『貴方の本気度が嬉しいので、ファックスを使った個別指導をします。』と言って頂いた。

私は前もって辞典の文法欄をコピーして持参していたが、先生は大笑いしながら『そんなもん放っておけ。文法なんか後回しだ！』とおっしゃりながら、直ぐに二人で宴会となり、俳句の何たるかを熱く熱く語り始めて下さった。

『君には俳句を正しく厳しく教える。』とお約束いただいて、もう7年が経つ。

専用の用紙を自分で作り、一枚8句の添削紙を何百通送受信したであろうか？

ファックスが壊れ、今3台目である。

先生から頂いた俳句集は、全てノートに転記して付箋を付けて質問してきた。

面倒臭がりでアンドシゴロの自分が、初めて俳句だけ、いまだにワクワクしながら続いている事が不思議でならない。

俳句の上達法は『多作・多捨』といわれ、淵脇先生から『下手な鉄砲、数打ちゃ当たる。』と言われ続けているので、『はい！マシンガン投句致します。』と、ＮＨＫ全国俳句大会、宮若全国俳句大会や県内外の俳句大会に投句し、運良く入選も続いている。

その後、㈳全国俳人協会の入会や『河鹿』同人のご推挙を受けたが、いまだに作句の苦労も知らず、先生の手の平の中で遊び惚けている子供のまま、八年目を迎える『俳句の新参者』である事に違いない。

『子らに説く知足の教え生御霊（いきみたま）』（秋）

二、梶原宣俊さんとの出会い

炉ばたセイ談第16号で喜多流能楽謡教士の梶原宣俊さんが、私との出会いをご紹介下さり誠に恐縮であった。

『夕鶴俳句会』の学級長（世話人）を引き受けたとたんに、出水市文化協会の手伝いを

する破目となり、文芸部長や理事まで押し付けられてしまった。

そして協会の新年会で梶原さんとお会いし俳句会へのご参加を勧めた次第である。

出水市に『能楽謡教士』という方がいらっしゃる事自体が不思議であったが、能に無知ながら内なる好奇心が目を醒ますであろうという予感は、的中した。

そして、出水喜多会の一弟子として、能楽の謡(うた)いの勉強が始まった。

能楽の謡いとは、お坊さまの読経と同じ『腹式呼吸』が原点である。

話が少し逸れるが、自分自身の不思議体験の一つに、還暦過ぎての声変りがあるが、古い友人にしか分からぬ事ではある。

カラオケでは、フォークが好きなのだが、高音部になるとニワトリの首締め状態で『ヒイー』と声が擦れるので、『キー』を低目にして歌っていた。

還暦過ぎた頃に体調を崩し、自宅で下手なピアノで作曲などして遊んでいたら、友人より合唱への参加を強く勧められた。

笑いながら『ニワトリ声』を訴えたが、全く聞き入れて貰えず、『ハモリ』を教えて貰う条件で、怖々参加してみた。

するとどうであろうか？　合唱の発声は『腹式呼吸』で喉声を使わず、身体を楽器として歌う方法であり、低高部も高音部も伸びやかに出て、いきなり高音のテノールパートを任され、その歌声も誉められた。

カラオケの『キー』は、松山千春だと-4だったのが、+2へ6音も上がり『ニワトリ』もいつの間にか居なくなっていた。

また、『カンニング・ブレス』という方法で目立たぬような息継ぎを教えて貰った事で歌の時も能の謡いの時も、途切れぬように声

を出し続ける事が可能となった。

喜多流の謡いは武士の謡いで男らしく力強いのだが、私はどちらかと言えば高音気味の子役とか、女性的な和吟が得意だ。

去る10月24日（日）、かごしま県民交流センター県民ホール能楽堂に於て、第68回鹿児島謡曲連合会大会が開催された。

梶原先生との連吟で、出水喜多会として、『花月』、『黒塚』の発表である。

昨年はコロナ禍で中止であったが、一昨年の『高砂』、『鬼界島』に次いで二度目の発表となった。

鹿児島謡曲連合会の会長・中西喜彦先生は炉ばたセイ談会の会長でいらっしゃるが、新米の私にとっては雲の上の方で未だご挨拶も叶っていないので恐縮の至りである。

今後、ご挨拶を済ませた上で、お伺いしたい事があるのだが、私共の発表の後、独調『千手』をお謡いになられた中西恵子氏の事である。

私は初心者レベルなので、舞台では終始教本とニラメッコ状態で謡っている。

地謡いは合唱団で、皆と呼吸を合わせて『同音』をご披露せねばと努力中なのだ。

中西恵子氏は中西会長のお嬢様でいらっしゃるのであろうかと思いながら拝聴していたが、独調の際もお手許に教本などは無く、胸を張って朗々と吟じておられた。

勝手乍ら、将来の大きな目標とさせて頂こうと心に決めた。

『際立てるシテの摺り足月冴ゆる』（冬）

三、渋谷五族プラス・ワン

私は出水市で生まれ育ち古稀を迎えた。

白男川家の本家跡は高尾野町唐笠木にあ

り、現在小さな納骨堂と古墓30基程の管理などを私が引き継いでいる。

亡き祖父母からは、『宮之城に白男川城があり、世が世であればお前は城主だった。』と聞かされていた。

七人兄弟の長男の父に、娘二人が生まれた後の男児は目一杯溺愛されてたようだ。

子供には田舎の城趾に興味などなく、図書館で父に調べさせられた人名事典で、『白男川家は桓武平家で渋谷の一族』の記述を見つけ、源義経好きの少年は大いに残念がった。

50歳を過ぎた頃、一度は祖先の地を確かめてみたくなり、宮之城の白男川地区を訪ね、城趾も見て、歴史資料館でお話を伺った。

資料の一部をコピーで頂き、白男川家は渋谷一族の一城主として島津と対峙したであろう事は分かったが、詳しい続柄と、後にこの地から移転した事由は分からなかった。

『秋風や訪ねし父祖の城の趾』（秋）

最近になって、梶原さんより『炉ばたセイ談』を見せて頂くようになり、入来院家の事や重朝庵主、貞子様の記述を貪るように読んでいる。

とりわけ貞子様のご学友H氏についての記述には心当りがあり、驚愕した。

昔話で恐縮だが、出水高校の三年生になって、世の中の事を自分の目で確認したくなり実証行動を開始した。学生運動である。

卒業まで授業などほとんど欠席して、東京・大阪・福岡など県内外を走り回っていた。

また、大阪や福岡の『前進社』にも出入りして、未だ会った事のないH氏のカリスマ像に憧れていたのだ。

貞子様のお話では、H氏はその後内ゲバで

亡くなられたとの事であったが、私は暴力や破壊が大嫌いで、言葉で説得できぬ世界に段々と嫌気がさし、その後娑婆の凡夫に戻り家庭を持ち、現在に至っている。

『ゲバラにも医師にもなれず冷奴』（夏）

当時このような話を人様に語る事など、一生無いと思っていたが、お会いできなかった貞子様が炉ばたセイ談にご降臨されていらっしゃる前では、凡夫の隠し事など卑怯で、笑止であろうと思い、今回の寄稿を決めた。

入来の里は放蕩人生の自分には極めて敷居の高い聖域ではあるが、渋谷五族プラス・ワンのご縁でご挨拶が叶う事を願ってやまない。

※御降りは正月に降る縁起ものの雨

『御降（おさが）りや茅門伝ふ水の綺羅』（正月）

（しらおがわ・たかひと
出水市文化協会　理事
俳句結社『河鹿』同人）

ゴミ拾いの哲学

田鍋　一樹

ゴミ拾いから宝拾いへ

私は、ゴミというか埃というかそういうものに大変興味を持っておりました。

というのは、ゴミは障子の桟にも溜まりますし、もちろん道路にはいろいろなごみが一杯あります。チリ取りゴミ拾いはとても一筋縄ではいきません。やさしくそーっと拭いてあげないと障子は破れますし、そうかというと固いものでこすらないといけないものもあります。ゴミって大変多様だと思います。

私は死の淵から生還して体が動くことが判り、リハビリを兼ねて恐る恐る散歩を始めました。

最初はユックリカミさんに手を引かれる感じで行っていましたが、段々自信がついてきてカミさんと一緒ながら一人で歩けるようになりました。段々歩けるようになると以前を思い出してクリーンウォークを始めました。

ということで散歩をしているのですが、田圃の車道から畦道に行くとき草むらに結構ごみが落ちていて『うーん』と思います。

カミさんと、何でこんなゴミを拾うのとか、汚いからやめようとか言いながら歩いています。「田圃道、気分爽快歩きつつ心を削ぐはゴミの空き缶」「今日こそはゴミは無きかと歩けるをところどころに空き缶のあり」と下手な短歌を作って慰みとしています。恰も弥次喜多道中です。無理するとまた心筋梗塞を起こす可能性がありますので、その辺をよく考えて行っています。

ゴミ拾いの目覚め

以前の話になりますが、平成２９年2月頃からですが、意を決して、家の周り近所、道路のゴミなど、拾い始めました。そして平成２９年１２月に鹿嶋のおはよー倫理塾に入会しました。朝、ゴミ拾いのことを時々実践報告していました。すると支部長が皆でやろうと提案されました。全員すぐ賛同して頂きました。会員長老の鈴木さんがゴミは宝なのでという感動的な話をされました。以来、ゴミ拾いではなく宝拾いと呼ぶことになりました。まちの道路には、色々なゴミが落ちています。汚いと思います。

愈々平成３１年（２０１９年）２月に宝拾い活動がスタートしました。以降毎月行っています。

尚、倫理の会は倫理研究所を中心に活動していますが、１８９２年生誕の丸山敏雄が創始者であり「万人幸福の栞」をバイブルとして全国展開している財団です。鹿児島にも支部があります。

住金に入社している現役時代、私は仕事柄、省エネルギー活動を一生懸命やってきました。当時企業で働いているとき、皆が全力でやると工場の無駄がなくなりとてもきれいになっていきました。そして、まちのゴミを無くすることも省エネに通じるものがあると思うようになっていました。ゴミで汚れていないまち、エネルギーを無駄遣いせずにCO_2で空気を汚さないまちは、まちの美化に不可欠だと思うからです。

生活倫理セミナーへの参加

令和元年６月、私は初めて富士高原の倫理研究所の生活倫理セミナーに参加しました。全てが心に残る素晴しいものでしたが、特に講話の中で示された2枚の写真と1枚のスラ

イドに釘付けになり今でも脳裏を離れません。その一つは、2代目の丸山竹秋会長がゴミを手押し車一杯に押してにこにこしておられる姿でありました。もう一つは、同じく竹秋会長が、まだ荒野の富士の裾野に立って周りをじーっと見ておられる姿でありました。まだ何もない富士の荒野に今日の富士研の形を脳裏に描いておられたのだと思います。正に足元から未来を見つめておられる姿だと思いました。そして実践10ヶ条がスクリーンに映し出されました。アッと驚きました。それは正しく省エネに通じる言葉が並んでいたからです。そこには、清掃を徹底しよう。ゴミを出来るだけ減らし、外でのごみは持ち帰ろう、電気を節約しよう、水を節約しようといった言葉が並んでいました。

ゴミ拾いの哲学

ゴミを拾うことによって道がきれいになりますし、その道を通る人の気分も良い筈です。

鹿嶋倫理の会のゴミ拾い（宝拾い）プロジェクトは、既に40回近く行って、ゴミに対する心の変化が起こりました。最初は、ごみを捨てた人に対して、何でごみを捨てるのだと恨みがましく思いました。そのような人はまだゴミ拾いの初心者です。ごみは宝だという言葉に接して、ごみを捨てる人は、例えば車の灰皿をパッと道路に捨てる人もいますが、これらの人は身辺を綺麗にするという心はありながら、自分の未来を自ら汚しているのではないかと思います。それは、過去を反省し未来に希望を持つことの真逆のことだと恐れます。

歩きながら道の宝を拾う、そのことにより自分の行く道が輝いてきます。同時にその宝を捨てて未来を汚した人の道も輝くよう助け

ているのではないかと思います。

自分の道も輝き、捨てた人の道も輝く手助けとなる。正しくゴミ拾いは宝拾いだと気づき日々実感しています。地道な宝拾いは、心輝く一歩になりました。そして、鹿嶋のまちが美しい街になる一歩を踏み出したのではないかと嬉しくなりました。

かしま環境ネットワークでの活動

一方私は、平成17年に設立されたかしま環境ネットワークの役員として平成24年より活動協力しています。爾来、個人的に道路のゴミ拾いをやっていましたが、その様子をあちらこちらで見ていたネットワークの会員から平成31年に鹿嶋クリーンウォークプロジェクトをやろうと提案がありみんなで合意されました。以来鹿嶋をきれいに、鹿嶋の環境を良くしようとクリーンウォークプロジェクトが開始され、毎月街のあちらこちらで活動を行っています。お蔭で鹿嶋の街の道路はゴミの量が大変少なくなってきました。

おはよー倫理塾での活動

おはよー倫理塾での宝拾いは、かしま環境ネットワークの活動に先んじてスタートしました。月1回朝6時～6時30分に行っています。ゴミ拾いのあとは、近くのマグドナルドでワイワイとコーヒーを飲んで散会します。

色々なゴミ拾いの団体

ゴミ拾いを行う団体は、国内に多く存在します。

例えば国内で最も大きな団体グリーンバードです。「きれいな街は、人の心もきれいにする」をコンセプトに誕生した原宿表参道発信のプロジェクトです。今や全国各地や海外にも広がっている運動です。

その他にも全国に色々あります。例えば令和クリーンRUN・10という団体は、皇居

かしま環境ネットワーククリーンウォークプロジェクトの様子

おはよー倫理塾の宝拾いの様子

の周りをきれいにしようとごみを拾いながら走ることを合言葉にしています。また荒川クリーンエイド・フォーラムは、『ごみ問題と向き合い自然とともに生きる社会』をビジョンにしています。更に地域貢献活動として【ウォーキング&琵琶湖岸清掃】は、プロバスケットボール選手やトップアスリートと一緒にびわ湖湖岸沿いをウォーキングしながら、街をキレイに!身も心も健康にという運動です。また各地域にもゴミ掃除団体があります。例えば福岡では福岡天神夜そうじや福岡天神クリーンデー。また鹿児島にもグリーンバード鹿児島チームという活動団体があり街をきれいにという活動を行っています。更にビーチクリーン（海岸清掃）ボランティアということで、誰でもお手軽にビーチをクリーンにできますので、ボランティアで海岸清掃をやってみませんかとやっていますし、大学でも「第１０回大学対校！　ゴミ拾い甲子園」の魅力を紹介しています。

　といったように無数にゴミ拾い団体は存在します。街をきれいにしようということが基本理念ですが、いずれも何故ゴミ拾いを行うのかという個人の心情に訴える哲学が存在しないように思えるのは残念です。

最後に

　想えば平成２８年に娘を亡くして、中々癒えることがなかった頃、昔職場でお世話になったおはよー倫理塾のシニア委員会委員長の出口さんに、朝来てみないかと誘われました。参加してみて、ゴミ拾いという地道で大きな実践の道をみんなで見つけたような気がいたします。宝は、どこでも落ちています。出口さんはその後自転車で毎朝散歩しているときゴミがあれば拾っているとのことで、「おー凄いなー」と思います。また私もカミさんと家

の近くを散歩していると「いつもありがとうございます」とか「大変ですねー」と声をかけられます。言ってみれば人知れずやっているのですが、見ている人もいるのだなーと思います。またある人が神宮の周りを散歩していてゴミが落ちていると、待てよ、田鍋さんはこんなゴミを拾っているんだよなーと拾って帰ったそうです。ゴミ拾いの輪が広がっているのを感じます。

忘れられない言葉

ゴミ拾いつまり宝拾いの実践活動を通じ、倫理塾で「万人幸福の栞」を毎回輪読している中で、ゴミ拾いは第１３条、『元を忘れず末を乱さず』に完全に沿っており、忘れられません。そして、この言葉がとても気に入っています。それは、確実に未来を輝かしてくれると思うからです。という訳でゴミ拾いを行っていることが、我が家の健康と大きな心の平安になっていることを感謝している次第です。

（ＮＰＯ法人「鹿嶋省エネ研究会」会長）

武家屋敷群の活用とこれからの観光

奈良迫　英光

一、伝統的建造物群保存地区と日本遺産

文化財保護法では、「伝統的建造物群保存地区」とは、城下町・宿場町・門前町・寺内町・港町・農村・漁村などの伝統的建造物群が残り、これと一体となして歴史的風致を形成している環境を保存するために、市町村が定める地区を指している。

この制度は、文化財としての建造物を「点」（単体）ではなく「面」（群）で保存しようとするもので、保存地区内では社寺・民家・蔵などの「建築物」はむろん、門・土塀・石垣・水路・墓・石塔・石仏・燈籠などの「工作物」、庭園・生垣・樹木・水路などの「環境物件」を特定し保存措置を図ることとされている。我が国にとってその価値が特に高いものを「重要伝統的建造物群保存地区」として選定しており、令和３年８月現在、日本全国で１０４市町村１２６地区あり、約３万件の伝統的建造物及び環境物件が特定され保護されている。

県内では、「知覧麓」、「出水麓」、「入来麓」「加世田麓」の４箇所が保存地区に選定されており、いずれの地区も武家屋敷群を中心とした武家町の名残を留めている。

薩摩藩は、領内を１１３の区画に割り、それぞれに地頭仮屋を設け、その周囲に「麓」という武士の集落を作り、その地域の行政と軍備を管轄させた。この制度は島津家当主の内城に対して外城といい、歴史用語として外

城制と呼ばれている。

また、鹿児島県では1県9市を構成自治体とする「薩摩の武士が生きた町～武家屋敷群「麓」を歩く」が令和元年5月、文化庁の「日本遺産」に認定された。

二、武家屋敷サミットの開催

平成23年出水市の渋谷市長（当時）の呼びかけで、南九州市、出水市、薩摩川内市の3市が連携して「伝統的建造物群保存地区」をもっと観光資源として活用しようと、広域観光推進という趣旨で「武家屋敷 SUMMIT 2011」が知覧武家屋敷で開催された。

小生がコーディネーターとなり「新しい時代の武家屋敷観光」をテーマに、市長とそれぞれの武家屋敷保存会の会長の6人が、今後の展開について意見を交換した。

武家屋敷の魅力を一緒に情報発信し、旅行客がそれぞれの地域を周遊できる環境整備に努め、リピーターを創造すべく、スタンプカードの発行やガイドの充実を図ることなどの取組を確認した。歴史的資源を活かし相互に連携・協調して今後活動する証として協定書も交換した。

新幹線停車駅を基点にバス、レンタカー、マイカーを活用した薩摩半島観光ルートの開発、武家屋敷群を保存・管理している団体の相互交流の推進、3市が協力しての県外客誘客活動の展開となっている。

武家屋敷のストーリーを繋ぎ、地域の四季折々の情報を提供し、相互に経済効果をもたらす取組が重要である。

コロナ禍を経験し、消費者意識が変化し、WEB予約、個人化が進んでいる。一方、ICTの進展は情報入手・発信の多様化、誘客の広域化を可能にしていることから、3市の新たなプラットホーム戦略が求められる。

三、各武家屋敷群の魅力と活用

（1）知覧武家屋敷群

第１８代知覧領主島津久峯の時代に造られた麓地区は、領主のお仮屋を中心に地割がなされ、その後方には母ガ岳の優雅な山容がひかえ、麓地区全体が一つの箱庭のような雰囲気を醸し出している。京の庭師が造った庭園は、母ガ岳を借景にイヌマキやサツキ、つつじが植栽され、築山泉水式１つ、枯山水式６つあり、約２７０年前（江戸時代）の感性を伝えている。

武家屋敷を繋ぐ道路の生け垣は、敵の侵入を防ぐために特有の作りとなっており、薩摩の小京都にふさわしい佇まいは、訪れる人の心を癒してやまない。

かつて知覧は戦時中に特攻隊の基地がおかれ、多くの若者が飛び立ち帰らぬ人となった悲劇の物語の地でもある。近くの「知覧特

知覧武家屋敷

知覧武家屋敷庭園

攻平和会館」はバブル期までは多くの観光客が訪れていたが、戦争を知らない世代が増え、また旅行ニーズの変化により入館者数は伸び悩んでいる。指宿への観光ルートの一つであるが、その指宿も宿泊者の減少という課題に直面している。

知覧は鹿児島でも有数の茶どころであり、茶摘み体験や茅葺屋根の部屋で庭園を眺めながらのお茶時間も提供したい。新しい需要開拓が望まれる。

（2）出水武家屋敷群

薩摩藩の鹿児島城下から領外へでる主要な街道の一つで、海沿いに肥後に通ずる重要な軍事的拠点で、国境には厳しい「野間の関所」が置かれた。出水麓は薩摩藩の中でも最も規模が大きく、また、集められた武士はつわものが多く、絶えず鍛錬を積んだと言われ、その精神は「出水兵児修養掟」に引き継がれ

ている。公開されている「税所邸」「竹添邸」で武家屋敷の魅力に触れることができる。ＮＨＫ大河ドラマ「篤姫」のロケ地に選ばれ、休日には「いずみ観光牛車」が運行され観光客の人気となっている。

また、着物で武家屋敷を散策後、琴の演奏、お茶の接待を受け、着衣した新品同様の着物は安価で持ち帰ることができる。特に外国人には日本文化を体験できることで人気を博している。最近「宮路邸」が富裕層向けの宿泊施設として改装オープンした。武家屋敷群の用途変更として注目されている。景観を守りながら、経済効果を創出するいい事例になることを期待したい。

出水市には世界一の羽数を誇る「ツル渡来地」があり、周辺の干拓地は「ラムサール条約」に登録された。駅を中心に武家屋敷群との回遊性を確保できるかが課題である。

出水武家屋敷

出水着物体験とお茶会

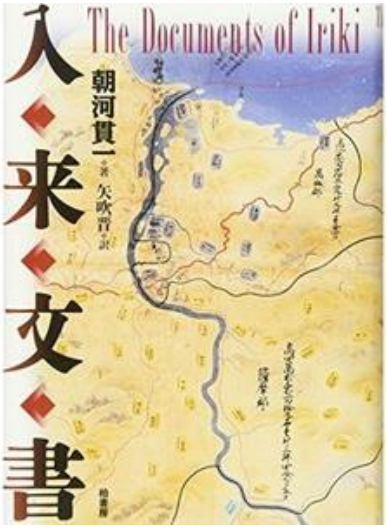
（3）入来武家屋敷群

鎌倉時代、相模国の渋谷氏が入来に入部、入来院姓を名乗った。清色城を居城とし、明治維新までこの地を統治した。１５９５年から１６１３年迄島津氏の直轄地となり、この間に山城の麓に石垣、土塁を巡らした地頭館が築かれ、今の麓集落が形成された。山中には「曲輪」や「堀切」が、また、整然とした区割や茅葺門、お仮屋跡など多数の史跡がある。

美しい玉石群は、樋脇川の自然石を組んであり、生垣の緑を引き立たせている。近くにある「旧増田家住宅」も見逃せない。

入来を有名にしたものとしてエール大学の朝河貫一博士の「入来文書」がある。鎌倉時代、地頭として北薩地方に入部した渋谷一族のひとつ、入来院氏の古文書を史料とする論文であり、封建制度を知る上での貴重な

入来茅葺門



The Documents of Iriki ― 入来文書
朝河 貫一・著／矢吹 晋・訳、柏書房（2005 年８月発売）

資料である。中世を研究する人が一度は訪れたいと思う地でもある。

入来武家屋敷群周辺には、市比野温泉、入来、諏訪温泉など特徴のある泉質を持つ鄙びた温泉がある。大宮神社は「君が代」発祥の地とされ、藺牟田池はラムサール条約の登録湿地となっている。

最近、その武家屋敷群の中には空き家も目立っている。訪れた人が休憩でき、食事や地元産品、小物等が購入できる施設が求められる。リピーターの創出には四季折々の魅力発信が不可欠であり、そのことが経済効果をもたらす。今、地域住民の賛同を得ながら、「入来薪能」復活の取組が模索されている。

四、これからの武家屋敷群の活かし方

誘客にはそれぞれの武家屋敷群の特徴・違い・魅力をいかに伝えるかが重要である。現地でのボランティアガイドの案内が欠かせない。人の語りがあって始めてその造りに納得する。従来、伝統的重要建造物群などの文化財は、保存することに重点を置いてきた。今後は保存しながら活用することで誘客につなげ、経済効果を地域全体に広げることが重要である。

人口減少が続く中で関係人口拡大は不可欠である。日本の良き伝統の証であり、先人達が築いてきた文化財を、多くの人々に見学してもらう機会を提供することは街の魅力発信となる。

「鏡餅」「ひな人形やこいのぼり」「着物」「風鈴」「七夕」「竹灯り」などを飾り、「琴の演奏、薪能、茶会、生花や習字」の発表や展示の場所等として、四季折々の仕掛けが欠かせない。武家屋敷群を基点に周辺の魅力も発信することが持続できる地域への「道しるべ」となる。

日南市にある飫肥は、伊東氏5万1千石の名残をとどめる城下町であるが、１０数年前までは　衰退が続く町であった。そこで飫肥城下町保存会が立ち上がり、「食べ歩き・まち歩き」のチケット付きマップを発売し、地域一体となって町の再生に努めている。日南線に「海幸・山幸」号が走り、武家屋敷群を活用することで新たな魅力ある街づくりに努めている。

県内には3か所以外にも、蒲生、加世田、垂水、串木野、甑島の里と手打、志布志、喜入等にも武家屋敷が残り、日本遺産に認定された。

今後は武家屋敷群・日本遺産のストーリーを繋ぎ、連携した取組が求められる。地域住民が文化の再興を通して、自分の街にシビックプライドを持つきっかけになることを期待したい。

五、これからの観光地づくり
・・「ＳＤＧｓ」への取組

（1）観光は地域社会産業

観光は社会的に有用ものが活かされることから「地域社会産業」として捉えている。大きな投資は必要なく現在ある地域資源の点検、磨き上げが重要である。

観光の流れは宴会型団体旅行から、多様なニーズを持ったツーリズムに変化している。温泉、名所旧跡、娯楽だけでは持続できる観光地づくりは難しい。

消費者は、そこにしかない「自然・歴史・伝統文化のストーリー」「人々の暮らし」など地域の生活・文化にふれる交流の場を求めている。

また、周辺の第1次産業・2次産業を取り込み、その魅力を観光客に体感させることが地域の魅力となる。

（2）地域をコーディネートできる人材の登用と情報発信

地域活性化には、地域をコーディネートできる人材の登用が欠かせない。「観光施設」「交通事業」「宿泊施設」「直売・物産店」「飲食業」「農林水産業」「自治体」などあらゆる情報が蓄積された組織で司令塔の役割が求められる。四季の変化、農水産物、祭り、イベント、映画の舞台等のコンテンツを、観光客が共感を覚える動画等に組み替えることも求められる。地域の多種多様な人と交わり、自らも汗をかき動き、ＳＮＳやコンピューターに熟知している人材を配置して敏速に対応することが重要である。

行先選択や滞在先での行程を決めるにあたり、スマホやインターネットの情報検索サイトが主流となっている。常に旬の情報を提供し、問合わせにはシームレスで、ワンストップで回答しなければならない。データとＩＴ技術を駆使したＤＸの推進で、地域資源の新たな価値創造をはかりたい。

（3）公共空間の魅力づくり

経済効果を循環させるには、日常の空間を楽しむ仕掛づくりが求められる。沿道からの看板・ゴミ箱の撤去、自動販売機の木枠化などで環境を守りたい。「農山村のくらし」「四季の自然の移ろい」「ストーリー」「五穀豊穣を願う信仰」「商店街」「文化ゾーン」等魅力を発信したい。

女性が楽しめる「果物狩り」「収穫体験」「陶芸教室」「田舎料理作り」等本物の体験メニューも欠かせない。体験後は木漏れ日の下で食事がでればより交流が深まる。美術館、博物館、文学館等の施設がある所は、定期的な展示会を、音楽祭等は前広にＰＲすることで滞在する人が多くなる。

（4）「食」の魅力創出

観光にとって欠かせないのが「食」であり、誘客には旬の情報が必要である。古民家や地元の人が行く居酒屋、農家での手作りの田舎料理、獲れた魚介類を使った漁師さんの店での食事等に人気がある。「食」こそ地域の生活文化を表すものである。

顧客のニーズは「安全・安心」「生産者の顔が見える食材で収穫までのストーリーが映る」ことである。近くに道の駅、直売店があれば来訪する楽しみも増加する。

（5）地域・組織間の連携

自治体のパンフレットは我町に関することしか掲載してないのが多い。「観光客に県境はなく、広域に移動する」ことから周辺の市町村の観光資源、生活・文化を一緒にＰＲすることで自分の町にないものがカバーされ、波及効果が生まれる。

また、自治体、観光団体、特産品協会、商工会などと連携することで相乗効果を高めることとなる。特に大都市圏でのＰＲはそれが功を奏する。

地域を回遊させることで経済効果が循環し、住民のシビックプライドを高め「おもてなしの心」の醸成にもつながる。垣根を超えた連携を強化したい。

（6）インバウンド・富裕層への対応

コロナ禍でインバウンドは蒸発したが、収束後は大きなブームが来ると想定される。

鹿児島県は東アジアに近く、４か国からの定期便が再開されると一気に回復すると思われる。外国人の滞在には、外国語表記の充実、キャシュレス店舗の拡大、バリアフリー、宿泊施設以外の食事場所提供等ストレスフリーの取組が欠かせない。

日本人の国内旅行需要が成熟している中

で、外国人受入こそが地域を救う方策の一つでもあり、なかでも日本文化体験が欠かせない。また、富裕層は消費額が大きく経済効果をもたらす。人口の上位０・３％にすぎない富裕層が全旅行消費額の４分の１を占めている。質の高いメニューを提供したい

六、最後に

観光は従来、「宿泊や観光施設、運輸機関、飲食店・お土産店」等がビジネスを展開してきた。これからは、「住民、農林水産業、製造業、文化施設」等直接観光に関与してこなかった人たちも取り込み、地域の魅力を創出し発信することが不可欠である。「量」から「質」への転換を図り、観光従事者のスティタスを上げる努力も欠かせない。

「社会」「経済」「環境」を守ることが「持続可能な観光地（ＳＤＧｓ）」となる。住民が地域に誇りを持つことで来訪者に対しブランド価値を糧に温かいおもてなしが提供できる。シビックプライドを醸成したいものである。

不来方（こずかた）の　お城の草に
寝転びて　空に吸はれし　十五の心
～石川啄木～

（元鹿児島県観光プロデューサー）

【参考資料】

・かごしまよかとこ１００選
・薩摩川内市パンフ
・フリー百科事典ウィキペディア
・鹿児島県観光連盟

蕎麦を打つ！

米森　寿美男

いつか蕎麦を自分の手で打って食べてみたいとの思いがあった。

郵便局を退職して、第二の人生をどのように過ごすかと考えて、実家の傾きかけた家を何とかリフォームして、裏の畑で蕎麦を育て、粉にして自らの手で練り、手打ちの蕎麦を食べてみたいと目標を掲げた。

蕎麦打ちのための道具を買い集め、「道の駅」でそば粉を求め、ＹｏｕＴｕｂｅで蕎麦打ち名人の技をしっかりと目に焼き付け、その通りに打ってみてはボソボソの蕎麦になり、何回打っても上手くいかない日々が続いた。

一、農業のすすめ

それでも畑は待ってくれないので、まずは草刈り機を購入して草を刈り、時間はたっぷりあると思い、鍬を担いで耕してみたもののすぐに息が上がってしまい、体力の無さに改めて気づかされてしまった。こんなことでは農家にはなれないと思い、トラックターで耕してもらい、あっという間に畑に大変身した。

畑の隅に先ずは、夏野菜を少し植えてみた。そこそこ期待に応えてくれて、トマト、ピーマン、オクラ、キュウリ、ゴーヤを収穫できた。トウモロコシを五本植え、実が付いて「これはいける。」と思った時には、敵もさるものでおいしくなる瞬間を見逃してくれず、翌日には食い荒らされていた。敵は見事な羽を持ったキジでオスと二匹のメスが大手を振って歩いていた。これからは、トウモロコシは買って食べるのが正しいと肝に銘じた。

トマトは一気に実を付け、オクラはすぐに大きくなり、収穫時期を逃すと筋が出来て硬くなる。ゴーヤが大きくなるのを待っているとすぐに黄色く色付いてしまい、収穫時期を逃してしまう。

けれども、苗から植えた作物が大きくなっていくのを見るのは、大きな楽しみであり、色々と想像を掻き立ててくれるものである。途中で枯れるものもあるが、一番の敵は天気であり、味方であるのも天気である。

二、蕎麦を育てる

農業一年生の夏、長年の夢であった蕎麦を自分で育て、手打ちして食べることを実現しようと思い、その道のプロである親戚の叔父に相談し、蕎麦の実を探して貰うことにした。

蕎麦は植えるための前準備がほとんど不要であり、植えてからも手が掛からないと言う素晴らしい作物である。これが蕎麦を育てるきっかけであり、刈り取りをどうするかも教えていただき、「農業公社」というところがコンバインを持って来て一網打尽であっという間に刈り取ってくれるらしいと聞いてなんとかやれる見通しを立てることができた。そのあとの製粉をどうするかという問題も、近くに小麦粉とそば粉を作っている製粉所があり、渡りに船であった。

蕎麦の実五kgを仕入れて貰い、植える準備を開始した。五アールの畑に五〇cm間隔で筋蒔きをする。これも結構きつい作業であるが、娘が手伝ってくれて、何とか蒔き終わった。その瞬間から、スズメ、鳩やカラスが格好の餌場であるかのように飛んでくる。彼らは人間が何をするかを、よーく見ているのだと感じた瞬間である。そこで対策として、釣り用のテグスを張り巡らして防御をしてみたら、まずまずの効果があった。

５アールの畑に花を咲かせた蕎麦

本当に手間が掛からずにどんどん成長し、一週間後には双葉が出てきて、すくすくと成長して、二か月もするときれいな花を咲かせてくれる。白く可憐な花は、眺めているだけで感動を与えてくれる程に見事である。そして、ミツバチが何処からか現れて、ぶんぶん飛び回っている。驚く程すごい数が集まってくる。おおいに働いてほしい、ミツバチ様様である。

どんどん実がついて来るようになり、刈り取りが近づいて来たので、「農業公社」に依頼して、刈り取りに来てもらい、コンバインで一気に収穫してもらい、三〇分で刈り取り完了、二十七kgの収穫があった。

ここからは地道な作業が必要である。『先ずは蕎麦の実と、実より小さなゴミを取り除き、さらに大きなゴミを地道に取り除く作業が大変だ。』それから天日干しで乾燥させて

粉にする準備をして、それを製粉機がある「ひまわりの家」に持ち込み、乾燥具合を計測して、基準を満たしていれば、粉にしてくれる。一週間以上天日干しさせたので合格だった。

三、蕎麦を打つ！

待ちに待った喜びの瞬間、自分で育てた蕎麦からそば粉十九kgが出来上がったので、早速蕎麦打ちに掛かってみる。

水回しが重要とビデオでも言っているので、三回に分けて混ぜながら入れると少しずつ玉が大きくなっていく。練りは出来るだけ早くして、のしは十円玉の厚さになるようにと思ってやるが、そんなに簡単ではない。切りの段階でも出来るだけ細くと思いつつ切っていくがなかなか真っ直ぐに切れない。

次は茹でだ。そこそこ大きな鍋を買ったが、きれいに茹で上げるのは深い鍋が必要だと思った。それにしても、蕎麦湯は大層美味しいのである。その上、血糖値を下げる効果があるのだ。

そんなことに注意しながら何回か繰り返して蕎麦を打ってみたが、出来たのはそこそこの田舎蕎麦であった。

一年目の蕎麦は、味は良かったが、「そばじゅい」(鹿児島ではたっぷりの鶏肉や野菜と太い蕎麦が入っている)と呼ばれるぐらいは出来るようになったと思える。

四、麦秋を見たい！

畑では、蕎麦の収穫後に堆肥をいっぱい入れて、小麦を植えることとした。

冬の風物詩である麦踏みをするために十二月初めに種を蒔く。これは、少し畝を作り一〇cm間隔で三~四粒を蒔いていく、これが難儀である。

年を越すと小さな芽が出て来るので、孫を連れて来て麦踏みを体験させると最初は夢中

麦踏み体験

でやっているが、その内に飽きてくるようで踏み込みがいい加減になって来る。我々が小さい時もそうだったので、仕方ないことかもしれない。

途中で畝を上げて麦の穂が倒れないようにするのと草取りを兼ねて、鍬を入れていくのが大変な作業である。それでも青々と広がる麦の穂にも癒しをもらえるのは最高である。

麦秋を迎え、黄色く色付いた小麦を刈り取る時が来る。「農業公社」のコンバインをお願いして、一気に刈り取ってもらう。こちらは一kgの種を蒔いて、三〇kgの小麦が収穫でき、ゴミと格闘して天日干しの乾燥を繰り返して、何とか小麦粉にすることができた。

手打ちうどんを早速試してみることにする。水と塩の加減と寝かせる時間で、麺の硬さやこしに差が出て来る。これももっと勉強して美味しいうどんを楽しみたいものだ。小

麦の利用方法はたくさんあり、麦茶は絶品、お好み焼き、天ぷらなど貴重である。

五、夏の新蕎麦に挑戦

三年目の春、三月末に蕎麦の種を蒔き、夏に収穫して夏蕎麦を食べてみたいと思い挑戦した。順調に芽が出て、花が咲き、今回はミツバチの巣箱まで用意して、受粉を助けてたくさん実を付けてもらおうと頑張った。そして、六月の梅雨時の晴れ間を狙って、「農業公社」からコンバインをお願いして、刈り取ってもらった。コンバインの調子がおかしいのか、ゴミが詰まるような音がしているとのことであった。収穫が心配だったが、何とたったの一kgしか収穫出来なかった。「くっ！、残念無念。」

春蕎麦はこの辺では、ほとんど作っていないとのことである。それは天気が悪いことと関係しているのか、それとも春蒔き用の種があるのかもしれない。これからは、秋収穫の蕎麦に専念しようと決めた。

六、農業は難しい

美味しい手打ち蕎麦が出来るまで、育てて収穫を繰り返したいと思うが、「蕎麦打っ！」は、奥が深い。

今年も種まきの時期が来ているので、着々と準備をしているところである。どんな蕎麦の花が咲くのか、どんな実がなるのか、大いに楽しみだ。出来た時の夢を見ながら作業を続けていくが、ホントに農業は難しい。

（元入来郵便局長）

お正月
―回想　入来の出来事（1）

中山とし子

故郷のことを思い出す時、それはほとんどの場合伝統行事と共によみがえります。私は終戦から五年目の一九五〇年に生まれました。幼児期から学童期（一九五五～一九六五年）、日本はまだ貧しかったものの、未来への槌音が高らかに聞こえ、大人も子供も顔を上げ、生活の中に笑い声が絶えなかった明るい空気を思い出すのです。そして、先祖から伝わる伝統行事や風習は、戦争から復員しやっと農作業や伝統行事に取りかかれるようになった家長たちの責任によって日々の暮らしの中に復活してきたのではなかったかと思うのです。

一九八九年に発刊された『聞き書き鹿児島の食事』（農山漁村文化協会発行）は、昭和初期の鹿児島の地域別の食を取り上げています。その中に「北薩摩〈農耕士族〉の食」も取り上げられています。食は伝統行事と共にあり、正月の本膳の献立や「穂垂れ引き」の興味深い献立の内容に懐かしさもひとしおです。しかし、それらは世の中の近代化と共に次第にすたれて行ったものも多かったと思うのです。

ここでは、私が小学生から中学生の頃に実際に経験した伝統行事を、思い出す限り正確に書き起こしてみようと思います。

お正月準備

お正月の準備は歳の暮れから始まります。まず、①屋敷周りの竹笹垣を新しいものに変える事。②門松に使うシラスと庭を浄めるためのシラスを集落で決められた場所に取りに

行く事。門松に使用する花木を山に取りに行く事。③副田温泉場に立つ歳の市で毬つき用の毬や新しい衣類や鍋や農機具や食材を調えること。④餅つき。

①竹笹垣の取り換え

竹笹垣を取り換える事は、現在では何のことやら想像できない方が多いのではないでしょうか。今から六十年～七十年くらい前、入来の農村地帯の屋敷は、小さな屋敷林と小さな菜園畑と牛小屋と人の住まいから成っていました。

この屋敷全体を孟宗竹の枝を束ねた笹垣で囲っていました。我が家のように小さな屋敷ならまだ作業は軽くてすむけれど、大きな農家は長い笹垣を毎年正月前に取り換えねばならず、大変な作業でした。私が小学生低学年の頃に手伝わされた記憶があるので、一九六〇年くらいにはまだやっていたと思います。

六十年代（昭和三十五年）以降、日本経済の急激な発展と共に家屋敷の改築も進み、笹垣の代わりにブロック塀にしたり、イチイの木の植栽で垣を作ったり、山茶花の垣根などが使われるようになった記憶があります。因みに、次ページの写真は、現在でも行われている笹垣の例です。

さて、その作業手順ですが、まず去年の竹笹垣の縄をほどいて古くなった竹の枝を取り除きます。代わりにまだ青い笹のついた笹枝を、孟宗竹を半分に割って横に渡した桟状の割竹で前後から挟んで隙間なく並べながら、ところどころを荒縄でくくって止めて行きます。この繰り返しによって新しい垣根ができて行きます。父親一人でやるには大仕事なので、笹竹を運んだり捨てたりの子供たちの手伝いが必要です。なぜ毎年造り替えるのか、理屈を考えだすと非合理的に思え、私はこの

唐津さるき元石町（佐賀県唐津市）の笹垣

手伝いが一番負担でした。

ただ、最近思うのですが、当時は大変面倒だった一年に一度の笹垣の取り換えは、去年のものが古くなったから、というだけだったのだろうかと。

伊勢神宮の二十年に一度の式年遷宮や春日大社での式年造替のように、「新たにする」

桂離宮（京都市）の笹垣

「改める」ということが、日本が古代自然から学んだ精神の基軸として、生活の中に連綿と存在していたのではないか。あれは神迎えという形の、家の神への儀礼でもあったのではないか、と思うのです。多分、日本の風習について調べれば、もっと正確なところがわかるのでしょう。目に見えないものを正しく恐れ敬うことは、時代が変わっても忘れてはならないと思います。

現代社会は、科学、科学と言うようになってから、物の考え方が薄っぺらくなったように感じています。そして、伝統的に行ってきた細かい風習を面倒なもの非合理的なものと捉えるようになりました。思い返すと、竹笹垣の造り替えは、青々と元気のよい竹笹によって、屋敷全体が入れ替わったくらい晴々と改まった気持ちにさせてくれ、自然と正月を迎える気持ちは高まったのです。

②門松作りとシラス取り

現在では家の門に門松を立てる家はめったになく、寺社やホテル、食べ物屋さんくらいしか無くなってしまったように思います。あの頃入来では、リヤカーいっぱいに採ってきたシラスで三角錐の山を門の左右に一つずつこしらえ、シラスの中に直接正月を寿ぐための花木を挿しました。松、竹、梅の枝、実花、などを束ねて挿した門松を一対作るのです。これらの花木は、すべて山にありました。時には南天の枝も入っていたかもしれませんが、砂に挿すわけなので木々は翌日には半枯れてしまいます。

この、砂に直接瑞木を挿す門松の方法は、奈良市にある菅原天満宮のものと同じです。門松は鳥居の脇に設えられます。この天満宮は、奈良に住んで以来の我が家の氏神様ですから、もう四十年以上のお付き合いになりま

菅原天満宮（奈良市菅原町）の鳥居脇の門松

す。宮司様によりますと、ここは、日本最古の天満宮だそうで（ここ菅原町は、菅原家発祥の地とされます）、門松には松竹梅と南天などが入っています。松は左右に雄松と雌松を入れるそうです。伝統的にこのようにして、神社の山で取れるものだけで門松を作って来られたそうです。知らない人には手抜きに見えるかもしれませんが、これを初詣で見たとき、故郷の門松も元々の歴史的形態を継承していたのか、と強く感動しました。

③歳の市

本田親虎氏が中心になって編纂された『入来町誌　上巻』にある手書の「入来町小字地図」によると、毎年歳の市が開かれたのは副田温泉場の若松町の商店街の通りです。

植木、衣類、刃物、おもちゃ、人形や羽子板や正月用品の露天商に混じって忘れられないのは、どことなくうさん臭い薬売りのこと。

蓄膿薬や傷薬の他に蛇を踊らせる見世物もあって、その周りには特に大勢の人が集まっていました。何を売っていたのか不明。スーパーに行けば何でも手に入る現代と違い、正月用に特別に毬や手袋や独楽を買ってもらった歳の市は、子供心に楽しい思い出です。

④餅つき

子供たちにとって正月準備で一番嬉しい日です。餅つきの日は決まっていて、暮れの三十日に行います。餅つき機のなかった時代、臼と杵ともち米を蒸す木製の蒸籠（せいろ）は各家にとって必需品でした。親戚中が集まり数軒分の餅を搗く日は、まるでお祭りのようでした。叔父叔母、いとこたちが集まり、三段の蒸籠に蒸し上がったもち米を、時には二つの臼に順番に入れ、男たちが杵をふるい、女たちは白いかっぽう着を着て、頭に姉さんかぶりの手ぬぐいをして、合いの手を入れながら賑やかに手水を差していました。

その周りで子供たちは、縁側に座ったり庭をウロウロしたりしながら、蒸籠の底に敷いてあった大量のご飯粒のついた竹の棒を、ハーモニカを吹くように持ち、一粒も残さないように食べるのが仕事の一つだったことを思い出します。蒸したもち米は、香りと云い甘さと云い、極旨超一級品でした。今でも忘れられない美味しさです。

軒数分の鏡餅、大中小のお飾り餅、のしもち、粟の餅、ねったぼ（餅に蒸したサツマイモを練り込んだもの）などができ上がるにつれ、大人たちは柔らかいねったぼをひょいひょいとおやつにくれたり、つきたての餅に黒砂糖をくるんで共におやつに食べたり・・・。

農家の人々にとっては、自分の田にできた米で餅を搗くことは、一年で一番誇らしい行事だったのではないでしょうか。

元旦

一月元旦は神と共に過ごす日とされ、誰も自宅の敷地から出てはならない日とされていました。庭にはお浄め用の白砂であるシラスが、五十センチから一メートルくらいの幅をもって、玄関から木戸口へ、井戸へ、厠へ、屋敷の東隅に祭られている荒神様へと、白道のように撒かれてあり、一月一日は、人間はその白道の上しか歩いてはならないとされていました。

おぼろな記憶ではあるが、玄関から木戸口までは、約八メートル。井戸は家の裏にあり、グルリと回れば十メートル以上。厠までは五メートルくらいだったか・・・。門松の土台以外にこの浄めの道用のシラスが必要だったので、シラスの量もかなりのものになります。重労働であるこのシラスを決められた採砂場から取って来るのは家長の仕事であり、車のなかった時代はリヤカーに筵を敷き、その上にシラスを載せて運びました。父はよく、一番小さい弟を連れて行ったものですが、まもなくこの面倒なお浄めの道は無くなりました。

元日の朝は、表座敷に家族全員が四角い塗りの膳を前に並び、「おめでとう」の家長の挨拶の後お年玉が一人一人に渡されます。子供にとっては、これが一番うれしかった。生活の大体の事が沈黙の中で行われ、家族間でも、物を言う時は神に聞こえないように小さな声で喋るよう親に注意された記憶があり、あれは何だったのだろう、と今不思議に思います。神様の休みの日だったのでしょうか。

その後、儀式用の膳を頂きます。元旦の膳には、干し海老の澄まし仕立てのお雑煮（干しシイタケ・白菜・三つ葉・かまぼこを加えます）、鶏（かしわ）の中皿（根菜類とコンニ

ヤク・厚揚げなどを煮しめたもの)、鶏の刺身(カシワ)、おば(クジラの皮の部分の脂を抜いたもの)の酢味噌かけ(最近ではあまり見かけません)、甘く煮た金時豆、大根膾など、毎年変わることなく同じ献立でした。

正月二日からが親戚への挨拶回りで、小さいながら本家であった我が家は、毎年二日が客迎えになっており、伯父夫婦や伯母たち一家がやってきて毎年忙しかった事！　三日、四日になると、あちこちの親戚にあいさつ回りに行き、子供ながら一人前の御馳走の膳を据えてもらったけど、お膳のすべてを平らげるのは子供には辛くて、ただお年玉だけが楽しみでしたっけ。

中学生ともなると玄関での挨拶回りだけになり、急速に正月の挨拶回りは廃れていったように記憶します。

何かにつけ神と共にあったあの頃が、たまらなく懐かしく思われます。

小正月の「穂垂れ引き」からは、次号に寄稿する予定です。

（エッセイスト）

三橋敏雄の戦争俳句
―遠山陽子「評伝三橋敏雄―したたかなダンディズム」を読んで―

梶原　宣俊

一、はじめに

三年前、七十二歳から老後の趣味として気楽に俳句を始めた。二〇一八年、出水市文化協会理事の新年会でたまたま隣に座っておられた夕鶴俳句会主宰の白男川孝仁さんにお会いし、入会を勧められ即始めた。さらに白男川さんが能謡曲に関心をもっておられると聞き、謡曲を教えることになった。私は二十五年前に喜多流の能楽師に出会い、やはり老後に備えて喜多流謡教士の免状を取得し、十数名の方々に教えてきた。その能謡曲と俳句の深い関係を知り、正岡子規や高浜虚子の句を参考にして「能謡曲と俳句―日本語の美しさを味わう」（出水郷土研究三十号　２０２０年）を書いた。

毎月一回の俳句会が楽しみで毎日俳句を作り始めた。二年間で二千句ぐらい作ってきたが納得のいくものはごく少数であった。十七文字で自分の思いや考えをわかりやすく述べただけのものである。これじゃだめだと思い二〇一八年からユーキャンの通信講座を受講し、ＮＨＫ俳句講座で基本を学んできた。そして二〇二一年六月号で、岸本尚毅の「俳句と想像力」の講座で初めて三橋敏雄の俳句に出会った。それは「戦争にたかる無数の蝿しずか」であった。

さらに句集「畳の上」から

・戦争と畳の上の団扇かな

・戦前へ年改まる闇の中

・戦前の一本道が現るる
・永遠に兄貴は戦死おとうとも
・過ちは繰り返します秋の月

等を引用し、遠山陽子の「評伝三橋敏雄」を紹介していた。そして、「戦争とその犠牲者への魂鎮めは敏雄生涯のテーマであった」と述べていた。

私は、これらの句に衝撃を受けた。私も戦争に関心があり、これまで戦争俳句を作り発表してきた。私のは「過ちは繰り返します原爆忌」である。この秋の月と原爆忌の差がプロと素人の差である。私は早速三橋敏雄に関心を持ち遠山陽子の「評伝」を読んだ。この本は、六三八ページの大著である。読んでいくうちに三橋敏雄の「戦争と海」の人生がはっきりと見えてきた。

私が戦争に関心を持ち始めたのは青春時代からである。私は敗戦の翌年六月に生まれ、いわゆる団塊世代の最初である。生まれる直前まで続いたあの大戦争のことが気になり近現代史を学び、文学思想を学んできた。

高校時代に太宰治の「人間失格」に出会い、その魅力にひかれ全作品を読んできた。太宰があの戦争をどうくぐってきたかに関心があり二〇〇三年に「選ばれし者の悲哀とリリシズム―太宰治の思想」(文芸社)として出版した。

大学生になると吉本隆明に出会い、やはりすべての著作を読んできた。その成果は「吉本隆明論―戦争体験の思想」(二〇〇四年新風舎)として出版した。そして二〇〇八年、これまで学んできた戦争の歴史と私の考えを「団塊世代の戦争論」(叢書見る)を出版した。

定年後、鹿児島県出水市に住み着き、特攻碑や戦争遺跡に関心を持ち「戦争遺跡の会」や「平和ガイドの会」に入会し、活動を続けてきた。二〇一八年には戦争体験の聞き取り

遠山 陽子・著「評伝三橋敏雄—したたかなダンディズム」（沖積舎、2012年9月発売、単行本、638ページ）

調査に参加し「出水の戦争体験談集」（出水市発行）として発行された。

私には、三橋敏雄は俳句界の吉本隆明に思えてきた。ご健在であれば、東京まで会いに行っただろう。

遠山陽子の評伝は実に詳細で、九年かけて三橋敏雄の生涯を余すところなく伝えている。その執念と愛情に頭が下がる。それほど三橋は魅力的な俳人であったということであろう。

二、三橋敏雄の生涯

ここでは、私なりに三橋の生涯と業績を簡潔に要約し、戦争にこだわった経過を追ってみたい。

三橋敏雄は一九二〇年（大正九年）東京八王子市で生まれた。吉本より四歳年上である。三歳の時、関東大震災が起き、大正デモクラシーが盛んな時代でもあった。しかし時代は恐慌と軍国主義が忍び寄っていた。一九二五

年（大正十四年）治安維持法と普通選挙法が公布された。この相反する法律の公布は激動の昭和時代と日本の運命を暗示していたと遠山は述べている。

一九三五年（昭和十年）十五歳の敏雄は、師範学校の試験に合格したが、東京堂書店に就職した。敏雄は後年、軍部のお先棒をかつぐような教師への疑いを持っていたと述べている。そして、教師ではなく俳人の道を選ぶことになる。

東京堂は現在のトーハンの前身で、実践商業学校等を設立し、社員教育やクラブ活動に力を入れていた。そして先輩の渡邊保夫から俳句部への入会を勧められる。俳句との出会いである。処女作は

窓越しに四角な空の五月晴れ

である。

敏雄は、これが入選していなかったら俳句はやめていたかもしれないと後年述べている。やがて敏雄は新興俳句の山口誓子や渡邊保夫、水原秋櫻子の句に感動する。新興俳句運動には、時代の閉塞と市民たちの鬱積した心情が存在した。

・一九三七年（昭和十二年）十七歳

敏雄は、渡邊白泉に師事し俳壇デビューを果たす。そして、いよいよ戦争俳句に取り組む。時代は満州事変が勃発し、盧溝橋事件が起きていた。西東三鬼は、戦争俳句と無季俳句を「京大俳句」で展開した。敏雄も戦争俳句五十七句を発表した。それを渡邊白泉、山口誓子が絶賛した。

・一九三八年（昭和十三年）十八歳

戦争俳句五十七句を「風」に掲載、俳壇デビュー

西東三鬼に出会う。

・一九三九年（昭和十四年）十九歳

十九歳の敏雄は東京堂を退社し、西東三鬼に師事する。敏雄は常識的な人より強烈な個性を持つ人を好み、三鬼の破滅的な性格の魅力にひかれた。まるで太宰治である。

・一九四〇年(昭和十五年)二十歳、

「京大俳句弾圧事件」「新興俳句弾圧事件」が起きる。西東三鬼は逮捕され翌年には一斉検挙が行われ、新興俳句は終焉を迎える。敏雄は、国家権力への怒りと恨みを終生忘れることはなかった。

敏雄は「趣味化してしまった俳句のための俳句作業は停止すべきだ」と述べている。私はショックを受けた。

・一九四三年(昭和十八年)二十三歳

太平洋戦争における敗色が濃くなる中、敏雄は横須賀海兵団に入団、十一月には発病入院する。

・一九四四年(昭和十九年)二十四歳

鎌倉吟行を実施する。

・一九四五年(昭和二十年敗戦)二十五歳

八王子空襲を体験し、敏雄は自転車で復員する。

敗戦を恨みよろこび十三夜

・一九四六年(昭和二十一年)二十六歳

渡邊白泉らと再会し、歌仙「谷目の巻」発行

三月、敏雄は運輸省航海訓練所に採用され、練習船黒潮丸の事務長として働き始める。三鬼と再会する。三鬼は「新俳句人連盟」が、日本民主主義文化連盟や赤旗に協力することに反対し分裂させる。

・一九四七年(昭和二十二年)二十七歳

敏雄は、三鬼らの「天狼」参加を拒み、「壺」の同人となる。

・一九四八年(昭和二十三年)二十八歳

太宰治が心中したこの年、敏雄は水原秋櫻

子の「馬酔木」に参加。「天狼」創刊。敏雄は黒潮丸、海王丸に乗り、帰還者引揚者の輸送に従事する。

・一九五五年（昭和三十年）三十五歳
ニューギニア、ソロモン群島に遺骨収集
　骨を拾ひに来し地の蝉を掘りおこす
・一九五六年（昭和三十一年）三十六歳
ナホトカの引き揚げ者輸送
　シベリヤを去る船欄の霜撫でて
・一九五七年（昭和三十二年）三十七歳
敏雄離婚
　沖に原爆太陽ふせぐ指に骨
・一九五八年（昭和三十三年）三十八歳
日本丸でビクトリア、バンクーバ航海
原水爆実験目撃
・一九五九年（昭和三十四年）三十九歳
四年前の遺骨収集の記録を「わが航海記その一ジャパニハハ」として発表
・一九六〇年（昭和三十五年）四十歳
三鬼と師弟対談　十二月号「俳句研究」
・一九六一年（昭和三十六年）四十一歳
桜島十六句発表
　火山灰墓の茶碗に沈す
現代俳句協会分裂
・一九六二年（昭和三十七年）四十二歳
三鬼没す。「断崖」終刊
・一九六四年（昭和三十九年）四十四歳
陸上勤務、再婚
・一九六五年（昭和四十年）四十五歳
「俳句評論」に参加
・一九六六年（昭和四十一年）四十六歳
第一句集「まぼろしの鱶」刊行
　夜の虹ああ放射能雨か灰か（「戦争文学全集」）
・一九六七年（昭和四十二年）四十七歳
現代俳句協会賞受賞

鬼赤く戦争はまだ続くなり

・一九六九年（昭和四十四年）四十九歳
評論活動増える、渡辺白泉死去
・一九七〇年（昭和四十五年）五十歳
銀河丸乗船、「俳句評論」一〇〇号記念に「優雅な予測」執筆
「模倣、改竄俳句の再生産に精をだす作者が多すぎる。俳句はすでに滅亡しつつある。人間俳句はコンピュータ俳句に勝てるわけがない。」
・一九七一年（昭和四十六年）五十一歳
「西東三鬼全句集」刊行
・一九七二年（昭和四十七年）五十二歳
海上生活に終止符、平河会館支配人
・一九七三年（昭和四十八年）五十三歳
第二句集「真神」発行

鬼赤く戦争はまだ続くなり

・一九七七年（昭和五十二年）五十七歳
第四句集、戦火想望俳句第四集「弾道」を出版

志那兵が銃を構へて来り泣く

「俳句研究」十一月号　三橋敏雄特集号
・一九七八年（昭和五十三年）五十八歳
平河会館退職、専門俳人になる
・一九八二年（昭和五十七年）六十二歳
全句集刊行
・一九八三年（昭和五十八年）六十三歳
俳句評論終刊
・一九八四年（昭和五十九年）六十四歳
「渡辺白泉全句集」刊行

戦争にたかる無数の蝿しづか

・一九九九年（平成十一年）七十九歳
作品発表を中止
二〇〇〇年（平成十二年）八十歳
二〇〇一年（平成十三年）八一歳
十二月一日没

三、三橋敏雄の戦争俳句

三橋敏雄の生涯を簡単に振り返ってきたが、あらためて三橋が俳句と戦争に深くこだわってきたかが明白である。敏雄にとって戦争と俳句は命そのものである。やがて戦争の記憶が薄れ、戦争体験者がいなくなるだろう。我が国の浅薄なマスコミはすでに昭和三十年代に「戦後は終わった」と述べていたが、三橋敏雄をはじめ一部の人々は戦争にこだわり、戦争について考えてきた。私のような戦後世代にとってもいまだ戦争は終わっていない。

「平和ボケ」と言われて久しいが、あの悲惨な大戦争の意味を問い続けることは、多くの戦死者に対する義務である。

その意味で三橋敏雄の戦争俳句は私たち戦後世代にとっても貴重な教訓であると言っていい。戦争体験のない私たちに戦争の本質、真実を追体験させてくれる。ここで改めて私の共感した戦争俳句を一部掲載したい。

・あを海へ煉瓦の壁が撃ちぬかれ
・射ちきたる弾道見えずとも低し
・砲撃てり見えざるものを木々を撃つ
・暁の敵前渡河の天をいかる
・戦車ゆきがりがりと地を掻きすすむ
・塹壕の夜も土匂ひ兵ねむる
・機関銃隠れ噴きつつ日落ちたり
・戦争の路地づたひゆき角に照る
・戦友の血飛沫を見る火線なり
・海みゆる馬に兵士は乗りそこなふ
・山を越へ河超え弧り戦死せり
・遺骨抱く白きうなじに遭ふ再び
・軍隊行く街に群衆の人立たす
・招魂祭皮膚に埃ふり花火降る
・九段の夜こもる馬啼き人黙る
・出征ぞ子供等犬は歓べり
・三年ごし帰還兵暑し天の河

・戦争はうるさし煙りし叫びたし
・地平より原爆に照らされたき日
・敗戦を恨みよろこび十三夜
・いっせいに柱の燃ゆる都かな
・骨を拾ひに来し地の蝉を堀りおこす
・彼我悲し戦跡の峰脚たらし
・シベリヤを去る船欄の霜撫でて
・沖に原爆太陽ふせぐ指に骨
・わが家になし絶滅の日本狼図
・夜の虹ああ放射能雨か灰か
・鬼赤く戦争はまだ続くなり
・飯白し八月十五日正午
・戦没の友のみ若し霜柱
・塹壕に支那の活字の書を瞥す
・酒を飲み酔ふに至らざる突撃
・戦前を鼠花火は苦しめり
・立ち目つむる戦亡の友よ夏の空
・大戦のかの日々を座し白き祖母
・敗戦の日の夏の皿いまも清し
・戦後即戦前永し夏の空
・戦争と畳の上の団扇かな
・戦争にたかる無数の蝿しづか
・戦前の一本道が現るる

四、三橋敏雄の俳句論

敏雄は、俳句の作り方についてあまり多くは語っていないが、「評伝」の中からいくつかを列挙してみたい。

＊おおむね季題季語が表している現象の説明になっている。

あるいは、感想や所見になっている。そういう俳句は報告であり「あ、そうかい」と言うしかない。そういう俳句を「そうかい俳句」という。そのひとつ上に「なるほどという俳句」がある。

感動しなければ俳句はできないと言われているが、人生そんなに感動しないものです。

感動がないからこそ俳句を作って感動したいと思うのです。言葉というのは単語だとその意味しか通じないが、ある言葉と言葉の関係づけによって思いがけない新鮮さを発揮してくる。あとはこれからどうしたら上手くなるかよく聞かれるが、それはまず才能、才能がないのに何年も無駄な時間を過ごすのはやめなさい。「俳句のやめ方」という本を書こうかと言ったことがある。

そして最後は念力です。吟行というのは景色を見にいくのではなく、言葉を探しに行くんです。発想は季語からしない。

また、言いすぎると味わいが少なくなる。

＊なぜ私は俳句を作るのかということをよく考えて答えを用意しなさい。

＊俳句は生の刻々を定着する業。生の短さを痛感しないでよい俳句はあり得ない。

＊言葉と言葉を関係づけて、新しい意味を発見できたときに、アタリと感動する。

＊無意識の中に趣味化してしまった俳句のための俳句作業を停止すべきことを教えられる。かけがへなく重大なる現代に生きる人間のひとりとして、私の深奥にはもっと明るい光源があると確信するとき、そこから生まれてくる未来性を、必ず後代に現実化しうる自信をもって、厳正なる意味でのロマンチシズムを、素朴に作品化し、肉体化しようと思う。

以上、三橋敏雄の俳句論を読み、私は真剣に俳句をやめようかと思った。老後の趣味として気軽に始め、まったく才能もなく、三年で二千句ほど「そうかい俳句」という駄作を作っただけである。敏雄は一晩で三〇〇句創ることをやっていた。とてもまねできるものではない。

「俳句のやめ方」という本を出したいと書

いているが、ぜひ出版してほしかった。しかし、三橋敏雄に出会ってその生き方に共感し、俳句の凄さに目からうろこの体験をした今、やめるのも口惜しい。最も共感したのは、「感動するために俳句を創る」である。私は青春以来、知的好奇心旺盛で、評論や歴史を学んできた。感性が貧弱で、無感動な人生を歩んできた。「感動するために俳句を創る」という言葉に心から共感した。もうしばらく心を入れ替えて真剣に俳句に取り組んでみようと思いなおした。感動を味わうために。

さらに、敏雄の戦争俳句を詠み、「団塊世代の戦争論パート二」を書きかけて五年間、そのままになっていたものを今年中に完成しようと思い立った。

五、おわりに

敏雄の生涯は、俳句と戦争と海の生涯であった。敏雄は、俳句に命を賭け、戦争に反対するわけでも賛成するわけでもなく、戦争の事実を淡々と詠んでいる。それが戦後生まれの私たちの心に染み渡る。

あの大戦争の傷はいまだに癒されることもなく宙に浮いている。

開戦、敗戦の原因、真実も未だ闇の中であり、多くの遺骨は海底に沈んだままであり、戦災孤児もいまだ闇の中である。

今から考えれば、国が滅びてもいいという「一億玉砕」をかかげ、日本自滅を賭けた政府国家の大戦争の総括は戦後七十六年たった今でも曖昧なままである。

敏雄の句はそれを問うているように私には思える。

私たち戦後生まれは、戦後復興と高度経済成長の中で、豊かな物質社会を享受してきた。しかし、世界の戦争は、未だに続いている。日本もいつ戦争に巻き込まれるかわからない。

私たちは、無数の戦争犠牲者を忘れることなく、「反戦平和の思想」を確固たるものにし、未だ世界中で戦争を続けている世界の現実の中で、生きてゆかねばならない。

戦争俳句は現在でも重要なテーマである。それが、三橋敏雄が生涯をかけて私たちに伝えたかったことであると信じている。

三橋敏雄　辞世の句

山に金太郎野に金次郎予は昼寝

（出水喜多会主宰）

【参考文献】

・遠山陽子「評伝三橋敏雄―したたかなダンディズム」

根白坂古戦場跡
― 歴史を訪ねる旅（16）

下土橋　渡

宮崎市の中心市街地から日向灘沿岸に沿って国道一〇号を約２５㎞北上したところで左折して山側へ６㎞ほど入ると、宮崎県児湯郡木城町の中心地に至る。木城町は、東西２４㎞、南北わずか６㎞という帯状の土地に約４７００人が暮らす町である。町の中央を東西に小丸川（高城川）が流れ、これに沿って一部耕地が開けているものの、背後は急峻な山岳地帯となっていて、土地の８４％が山林原野である。

この木城町には、１９１８年（大正７年）に武者小路実篤とその同志が理想郷を目指して開村し現在も２家族３人が暮らす「日向新しき村」や、日本の福祉事業の先駆者で「孤児の父」といわれる石井十次が１９１２年（明治４５年）に開設した孤児院を源流とする「石井記念友愛社」などがあって、木城町はこれまで何回も訪れている町である。

木城町を訪れるといつも、かつて高城が置かれていて今は城を模したメロディ時計台が建てられている城山公園に登って、木城町のこじんまりした町並みや小丸川の流れを見下ろす。そして帰りには「根白坂古戦場跡」に立ち寄るのである。

木城町の南隣の西都市に至る県道３１２号線を城山公園から２㎞ほど南下すると、大きくカーブした登り坂がある。その坂を登り切ったところに木城町営バスの「陣の内」バス停がある。この辺りが根白坂古戦場跡である。「陣の内」とはいかにも古戦場らしいが、

今はバス停横に説明板が立っているのみである。車を降りて、これまで何回も読んでいる説明板を、ある感慨をもってまた読み直す。

豊臣秀吉は九州を支配下におこうとしたとき、島津氏に、薩摩、大隅、日向の三州と、肥後と筑後の半分をくれてやろうといったが、島津側はそれを一笑に付した。そのとき島津義久、義弘の弟、いわゆる島津三兄弟の末弟・島津歳久だけは秀吉との和平を主張した。しかし、いったん交戦となると、今度は徹底抗戦を主張し、島津氏が秀吉に降伏した後も死ぬまで秀吉に反抗を続けた。

九州征伐から5年後の天正２０年（１５９２年）、秀吉の歳久に対する怒りは頂点に達し、島津義久に歳久討伐の命を下す。同年7月１８日、歳久は長兄義久の追討を受け竜ヶ水(鹿児島市吉野町）に自害して果てた。享年五十六。同時に家臣２７名が後を追って殉死した。

島津歳久は、自害するまでの１２年間を著者が住む現在の薩摩郡さつま町一帯（当時の祁答院十二郷一万八千石）を治めた領主だった。領内を良く治め、また悲運の智将だったこともあって、地元における歳久の人気は絶大だった。今も現存する史跡や遺跡の多さがそのことを物語っている。地元では別名を「金吾さぁ」と呼ばれ親しまれ、歳久をまつる同町中津川の大石神社では、４００年以上を経た現在でも毎年九月、「金吾さぁ踊り」が盛大に開催され、遺徳を偲んでいる。

歳久には男子がいなかった。そこで、薩州島津家（現出水市）から長女の婿養子として島津忠隣（ただちか）を迎え入れた。「根白坂の戦い」は、島津氏が秀吉に敗北し、秀吉が九州を平定するに至った九州天下分け目の戦いだったばかりか、歳久はこの戦いで忠隣を失うのである。忠隣、享年１９。忠隣戦死の三ヶ月前に生ま

高城川合戦場跡

木城町役場前から見上げる城山公園

城を模した城山公園のメロディ時計台

小丸川（高城川）の流れと木城町の町並み

れたばかりの忠隣の嫡男・常久は、歳久が自害までの5年間を祖父歳久のもとで養育された。上述した「ある感慨」とは、こうした史実に巡らす思いのことである。

一、二つの九州天下分け目の戦い

木城町は、明治の町村制施行により椎木村と高城村が合併して発足した合成地名であり、かつてこの地は新納院（にいろいん）と呼ばれていた。島津氏4代当主・島津忠宗の四男の島津時久が南北朝時代、新納院の地頭となってこの地に入り、高城（たかじょう）を築いて新納（にいろ）氏を名乗ったことに、この地の戦国時代の歴史は始まった。

高城は、北側、東側、南側が絶壁で、西側のみが平地につながっている標高６０ｍほどの台地の縁辺に建てられた山城であった。台地の西側には7つもの空堀が設けられていて、二度の大きな戦いでも陥落しなかったという山城の堅固さを誇った。

高城のある地は、現在では主幹道路である国道１０号から奥まったところにあるが、往古は、南へは薩摩に、北へは豊後（大分）に通ずる交通の要衝であったため、高城を制するものが南九州を制するとまで言われ、以後この城をめぐって激しい戦いが繰り広げられ、城の支配は畠山氏、伊東氏、島津氏、秋月氏と入れ替わり、一国一城令で廃城となった。

とりわけ大きな戦いだったのが、九州の天下分け目の戦いとなった１５７８年の「高城川合戦」とその９年後の１５８７年の「根白坂の戦い」である。

日向の実力者であった伊東氏は、木崎原の戦い（現在の宮崎県えびの市）で島津氏に大敗すると、豊後（現在の大分）の大友氏を頼って豊後へ退去していく。そこで大友宗麟は伊東氏の旧領を回復し自らのキリスト教国を建設せんと日向へ侵攻を開始する。これが「高

城川合戦」である。

大友軍は、高城の東に位置する台地に5つの陣を設け、総勢5万の兵で、高城を攻め、民家に火を放ち、三度にわたって攻撃したが、高城城主・山田新介有信（島津氏の家臣で、伊東氏の退却で高城城主に任じられた）は、島津義久の援もあって、盛り返し豊後勢を多数討ち取った。

その後、大友氏は、援軍を得て攻撃するか自分らのみで攻撃するか軍議が一致しない。すると、業を煮やした田北鎮周が味方を鼓舞するため無謀にも島津軍に突撃する。それに釣られる形で大友軍が出撃し、陣形が伸びきったところを島津軍に突かれ大敗した。島津軍は耳川(現在の日向市美々津)まで追討し、この間の草原は豊後軍の死骸で埋め尽くされたという。このため、「高城川合戦」は「耳川の戦い」とも言われる。

高城城主・山田新介有信は、この戦いの7回忌にあたる1585年（天正13年）に、敵味方の区別なく戦死者の霊を慰めるために現在の児湯郡川南町に六地蔵塔を建立した。この供養塔は、現在は「宗麟原供養塔」と呼ばれている。

この戦いで一段と力をつけた島津氏は、飛ぶ鳥を落とす勢いで九州全域を攻めていく。それに対して、大友宗麟は島津勢が豊後に進攻するに及ぶと、自ら大坂城に赴き豊臣秀吉に救援を求める。天下統一を目論む秀吉は、宗麟の要請を受諾し、九州征伐に乗り出す。

9年後、高城を舞台に再び九州天下分け目の戦いが繰り広げられることになる。これが「根白坂の戦い」である。

二、根白坂の戦い

豊臣秀吉は、天正15年（1587年）1月に九州征伐の動員令を発し、畿内や中

国・四国の諸大名による軍を九州に送り出した。3月上旬には秀吉の弟・豊臣秀長の軍勢が豊前小倉において先着していた毛利輝元や宇喜多秀家、宮部継潤らの軍勢と合流し、総勢10万になった。

秀長軍は、3月29日には日向北部の要衝である日向松尾城を陥落させ、日向南部へ進行、高城を包囲した。高城は堅固であったため秀長軍は無理に力攻めをせず、城を何重にも包囲して兵糧攻めとし、加えて島津軍が高城を助けに来るなら必ず通るはずの根白坂に砦を構築し、ここを要塞化して島津軍を迎え撃つ戦略を取った。

根白坂は先の高城川合戦において、島津義久が一軍を率いて戦況を見下ろす場所にした格好の高台であった。秀長軍は高城川合戦を研究し、先手必勝でまずこの根白坂を押さえたのである。

そして、秀吉の率いる本隊は、3月29日に豊前小倉に着陣し、4月16日には肥後隈本(熊本)に進軍した。

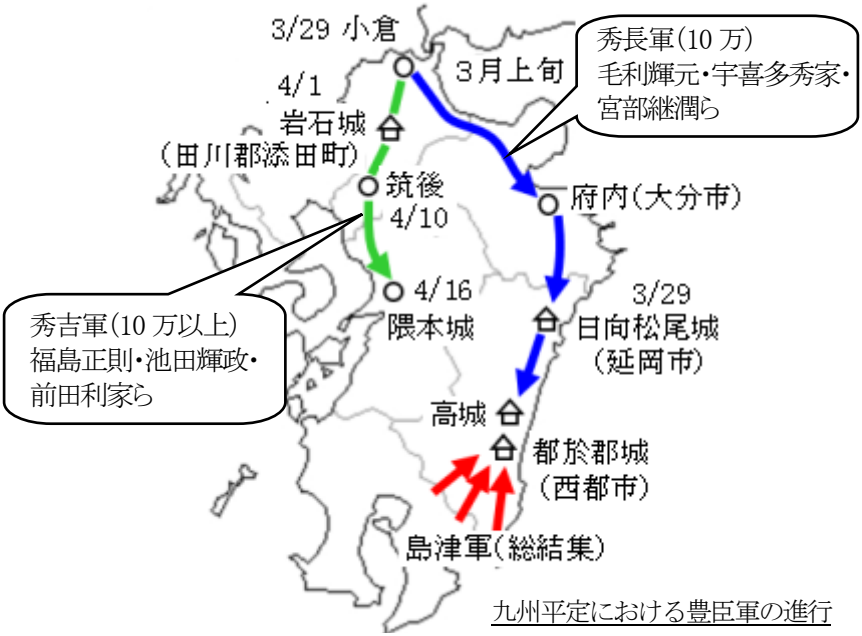
島津義久は九州西側から秀吉の軍勢が南下していることを知って狼狽した。秀長の軍勢に備えるために薩摩・大隅などの軍勢の大半を日向都於郡城(とのこおりじょう)(西都市)に結集していて、島津軍は九州西側の守備が手薄だった。

局面の打破を迫られた義久は、高城を包囲する秀長の勢に決戦を挑み、4月17日夜半、根白坂に夜襲をかけた。しかし、それを予測していた宮部継潤は、多数の人夫を使い、深さ2間(約3．6m)、幅3間(約5．4m)程の堀を設け、堀の際に土塁を盛って、2間ほどの木や竹の柱を立て、柵を作り、さらにその中に鉄砲隊を組織し、厳重な体制で待ち受けていた。

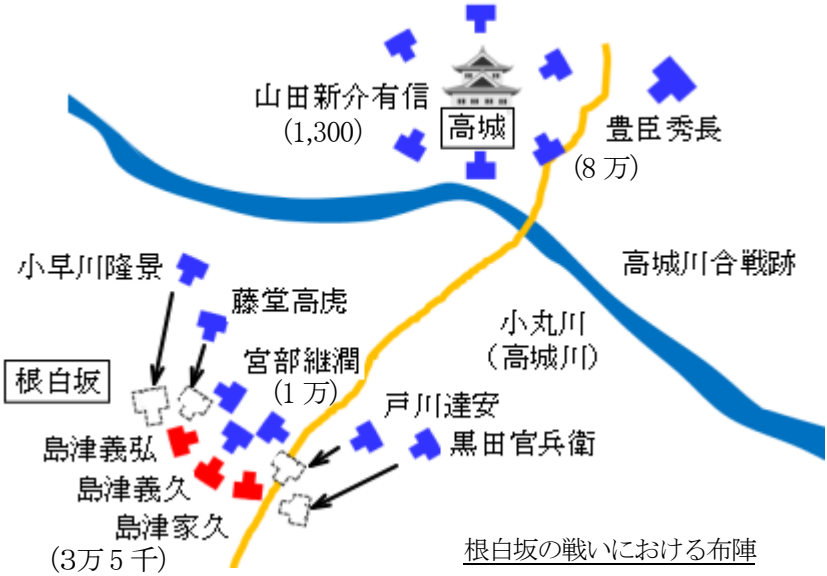
島津軍はその柵を倒すべく試みたが、苦戦

根白坂（陣の内バス停と根白坂の戦い説明板）

根白坂（バス停から西へ入ると、一帯は台地になっている）



九州平定における豊臣軍の進行



根白坂の戦いにおける布陣

を強いられ突破できずにいたところへ、藤堂高虎と戸川達安の手勢らが宮部継潤の救援に向かい、島津軍を翻弄。さらに小早川・黒田勢が挟撃を仕掛けたため、島津軍は、島津忠隣・猿渡信光等ほぼ全員が討死し完敗した。

義久・義弘は僅かな手勢と共に都於郡城に退却した。根白坂における主力決戦に完敗した島津氏は軍を立て直す暇もなく、島津義久は戦意を失い、剃髪して龍伯と号した上で５月８日、泰平寺（現在の鹿児島県薩摩川内市）で秀吉に謁見して降伏した。

高城は、この時になっても陥落せずに抵抗を続けていたが、義久の説得により、城主・山田新介有信は開城し、九州内における天下分け目の戦いはようやく終結した。

三、島津忠隣（ただちか）

永禄１２年（１５６９年）、島津氏の分家・薩州家６代当主・島津義虎と御平（島津義久の長女）の次男として生まれる。１５歳の天正１２年（１５８４年）、男子のいなかった大叔父・島津歳久の養嗣子となり、歳久の長女を室とした。

天正１４年（１５８６年）、叛乱した筑紫広門（現在の佐賀県鳥栖市）征伐の副将に任じられ初陣を果たしたが、１７歳と若年であったため二人の武将を付けられたという。同年、岩屋城（福岡県太宰府市）の戦いにも参加して軍功を上げた。

天正１５年（１５８７年）４月１７日の根白坂の夜襲で鉄砲傷を被った忠隣は、出血はなはだしく家臣・鎌田囚獄左衛門政金に水を所望した。しかし水がどこにもなかったため、囚獄左衛門が傍らにあった青梅を引き千切って含ませてやると、忠隣は満足したように絶命したという。享年１９。家臣らは遺体を盾板に載せて退却した。

四、歳久自害の後 ～ 日置島津家の成立

天正２０年（１５９２年）７月１８日に島津歳久が竜ヶ水において自害したとの悲報が宮之城に届くと、歳久夫人、忠隣夫人、忠隣の嫡男常久（当時６歳）をはじめ、家臣一同は、処分を不服としてただちに祁答院虎居城（現鹿児島県さつま町宮之城屋地）に立て籠った。この籠城を怒った島津義久は、宮之城の大窓寺の和尚宛に書簡を送り、直ちに下城するように促した。

一ヶ月の籠城の末、常久成人の際に旧領を回復するとの条件で籠城をといた常久親子と祖母、家臣は、義久の命を受けた入来院１５代重時が宮之城に赴き一行を連れて入来城に移ることになった（島津歳久の母は入来院１１代入来院重聡の娘・雪窓夫人であった）。

さらに１０月、細川幽斎によって、入来の堂の原（現在の薩摩川内市樋脇町塔之原）３００石を知行された。この３００石は堪忍料（生活を維持していく費用）とされ、２年後の文禄４年（１５９５年）の所替えによって常久は日置、山田、神之川（現在の日置市日吉町日置、山田、神之川）３６００石を知行された。祖父の島津歳久を初代当主、父の忠隣を第２代当主、常久を第３代当主として日置島津家が成立した。

（元九州職業能力開発大学校教授）

【参考にしたサイト及び図書】

（１）根白坂の戦い ― ウィキペディア
（２）島津忠隣 ― ウィキペディア
（３）神園清秀『悦窓（歳久公室）・蓮秀（忠隣公室）並びに袈裟菊丸（常久）の宮之城籠城』（島津金吾歳久公四百年祭志、平成７年１１月発行）

編集後記・・・

■本号では、出水市在住で渋谷五族とご縁をお持ちの白男川孝仁様と、入来院久子さんのご長男で庵主・重朝さんの初孫さんである串田達治様に新たにご執筆頂きました。お蔭で今年も内容・ボリュームとも充実した冊子が出来上がり喜んでおります。ご執筆頂きました皆様ありがとうございました。■昨年6月に「入来花水木会」が設立され、今年6月に第1回の総会が開催されました。事務局が「炉ばたセイ談」と同じく茅葺門邸にあることもあって、「入来花水木会」の活動の様子なども掲載しながらともに発展したらいいなと思い、総会で「炉ばたセイ談」のご案内と寄稿のお願いをさせて頂きました。そのため原稿締切が8月末日、冊子完成が10月末日と例年より1ケ月遅れになりました。■鹿児島県立図書館では県内のグループや団体や機関等が発行する同人誌や文芸誌などを郷土資料として収集・保存し、一般公開する取り組みを行っています。「炉ばたセイ談」も第15号（令和元年秋号）から蔵書に加えてもらっていて、県立図書館のホームページの蔵書検索でタイトルに「炉ばたセイ談」を入力して検索すればヒットされます。今後も所蔵してもらうようにお願いしていきます。また、地元の図書館にも所蔵をお願いしたいと考えています。（下土橋）

■昨年は、前会長の渋谷繁樹さんの追悼となった「炉ばたセイ談」でしたが、あっという間に時が流れまた発行の時期となりました。今回も下土橋さんにおんぶに抱っこの編集で仕上がった「炉ばたセイ談」ですが、「入来花水木会」の会員の方々も寄稿してくださりありがとうございました。今後はより多くの「入来花水木会」会員の方々の寄稿を期待したいところです。どうぞよろしくお願いいたします。最後に、今回寄稿してくださったすべての皆さまに心より感謝いたします。（久子）

「炉ばたセイ談」　第18号
炉ばたセイ談会会長　中西喜彦
編集担当　下土橋渡・入来院久子
事務局〒895―1402
薩摩川内市入来町浦之名130
入来院重朝方
TEL・FAX　0996―44―3586
印刷　新大同印刷㈱（0996―30―1811）

令和４年秋

第１８号

〒895-1402

薩摩川内市入来町浦之名 130

炉ばたセイ談事務局